

Yokoyama Dam 60th Anniversary



守り支えて60年、これからもずっと 横山ダム60年の軌跡

守り支えて60年、これからもずっと 横山ダム60年の軌跡

国土交通省中部地方整備局 木曽川水系ダム統合管理事務所

国土交通省中部地方整備局
木曽川水系ダム統合管理事務所



プロローグ

揖斐川と 共に生きるために

岐阜県と福井県の県境にある冠山を水源とし、濃尾平野の西側を流れ伊勢湾に注ぐ流路延長約121kmに及ぶ一級河川「揖斐川」。

豊かで、清らかな揖斐川の流れば、その水の恵みによって人々を始めとする数多くの生命を生き生きと育み、養っています。

そんな揖斐川ですが、古来より台風などによって度々大きな洪水を起し、人々を苦しめてきた川でもありました。昭和34年の伊勢湾台風では揖斐川流域で死者・行方不明者29人、浸水家屋15,000戸の大きな被害をもたらすなど、長年にわたって水害と闘ってきました。

そうした中、昭和28年に計画されたのが、揖斐川の洪水調節・灌漑用水の供給・発電を目的とした横山ダムです。

昭和39年10月の管理運用開始から60年間、揖斐川と共に生きてきた横山ダムの軌跡を振り返ります。

横山ダムの60年 1964～2024 Yokoyama Dam 60th Anniversary

横山ダム60年のあゆみ

治水や水資源開発に対する地域からの要請によって、昭和26年から岐阜県による多目的ダム調査が始まりました。昭和28年には建設省（現 国土交通省）に事業移管され、直轄事業として調査に着手、その後、昭和32年に横山ダム調査事務所が開所し、昭和34年4月には横山ダム工事事務所へ改組、同年9月にダム工事に着手、昭和39年のダム完成後は横山ダム管理所としてダムの維持管理を行いました。

平成2年からは治水機能の回復と増強を図る横山ダム再開発事業に着手し、平成23年に事業を完了しました。また、平成20年には横山ダムの上流に徳山ダムが完成し、この結果、徳山ダムとの連携運用が可能となり、揖斐川の洪水調節に多大な貢献ができるようになりました。



伊勢湾台風による洪水被害
和歌山県潮岬に上陸した台風15号は、低気圧と激しい風による海面上昇が驚異的な高潮を発生させ、伊勢湾一帯を襲い、大災害をもたらしました。



ダムサイト右岸上流

1951

昭和26年

・日米安全保障条約調印

・岐阜県による「多目的ダム調査」の開始

1959

昭和34年

・伊勢湾台風、死者・行方不明者5,098名

・横山ダム工事事務所へ改組
ダム工事に着手
・8月13日／洪水被害
・9月26日／伊勢湾台風による洪水被害

1953

昭和28年

・日本で初のテレビ放送開始

・直轄事業として建設省（現国土交通省）が調査に着手
・木曽川水系流量改訂

1960

昭和35年

・カラーテレビ本放送開始

・4月／バイパス（転流工）工事着手

1957

昭和32年

・初の百円硬貨、五千円紙幣発行

・横山ダム調査事務所を開所

1962

昭和37年

・ビートルズ レコードデビュー

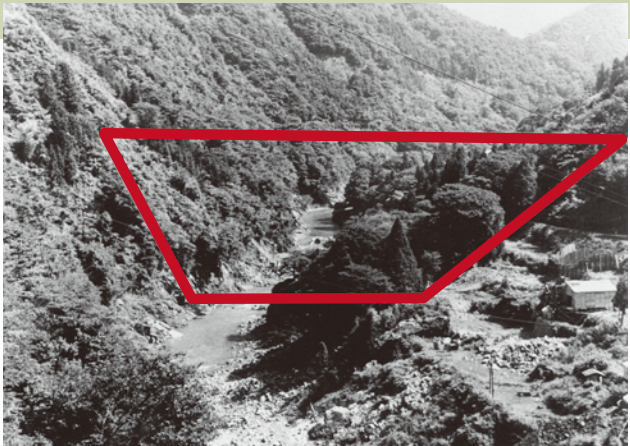
・2月／本体コンクリート打設開始



ダムサイト左岸



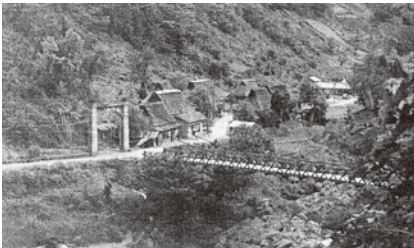
ダムサイト(下流より)



ダム建設予定地(下流より)



水没前の親地区



水没前の鬼姫生地区

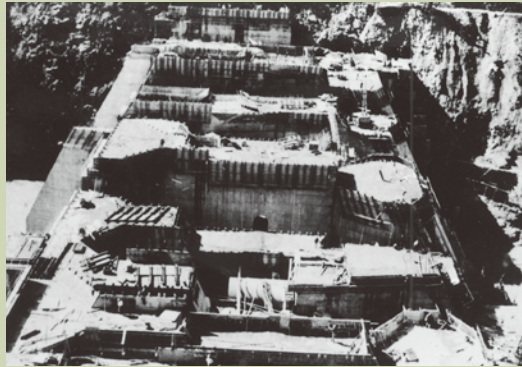


水没前のえびし岩（旧第一発電所下）

用語解説
【転流工】ダム工事が乾いた状態で行えるよう、川の水の流れを変えるための仮設備を建設する工事のこと。
【ダムサイト】ダムが建設される場所のこと。
【打設】運ばれてきたコンクリートを所定の位置に詰め込む作業のこと。



打設初期(下流より)



ダム中心部に於けるホロー状況



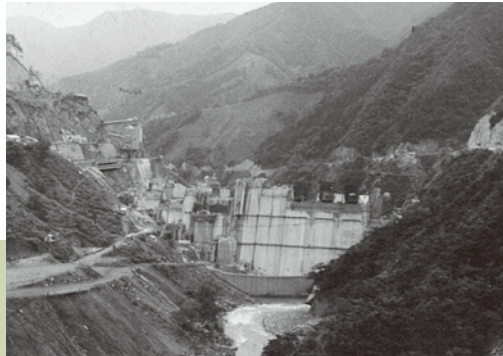
左岸仮設道路



右岸転流工 坑口



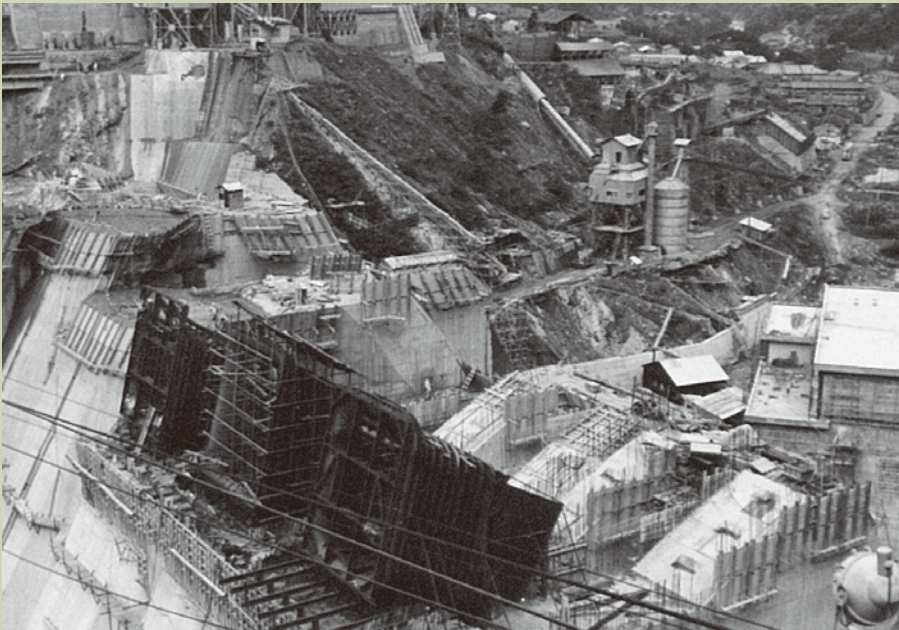
左岸プラント



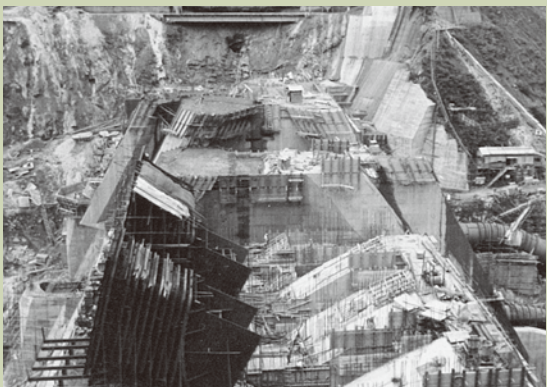
建設中ダム本体



本体及びオリフィス管設置



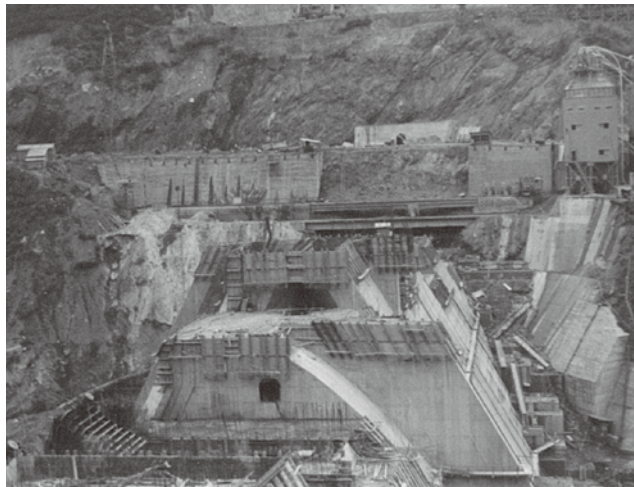
本体及びオリフィス管設置



オリフィス管設置

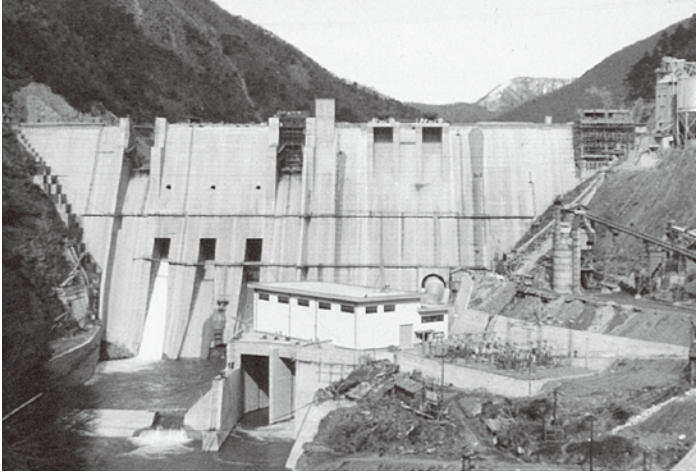


本体及びオリフィス管設置状況



打設中(右岸より左岸を見る)

【プラント】
材料を混ぜ合わせ、ダム建設用のコンクリートを作るための施設。(大量のコンクリートが必要なダム建設の場合、購入するより現場製造のほうが安い
【ホロー】
中空(=hollow)の状況。中空重力式ダムは英語でhollow gravity dam。
【オリフィス管】
ダムから水を放流するための管。



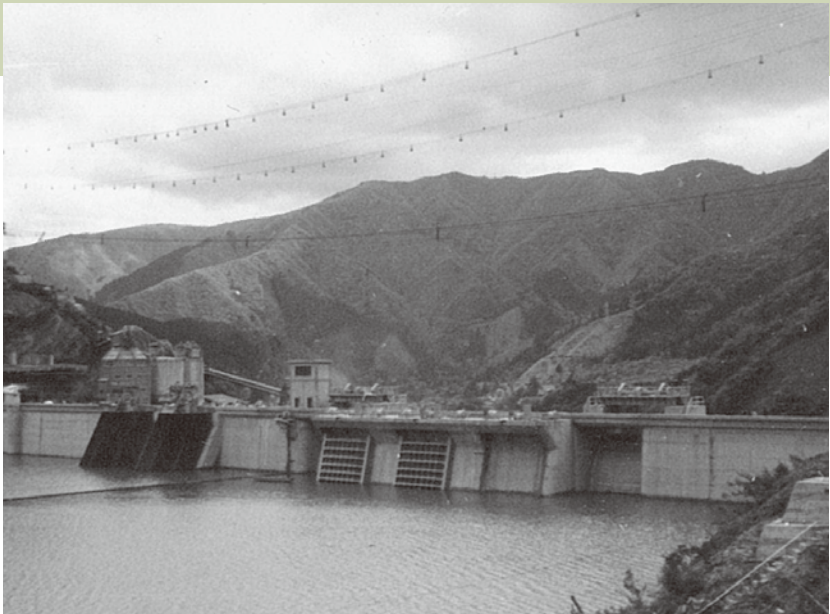
横山ダム湛水式



横山ダム湛水式



門扉閉鎖の瞬間



完成後のダムを望む



昭和50年大出水(万石地点)



横山ダム30周年記念事業

1963

・3月／横山ダム基本計画決定

昭和38年

・ケネディ米大統領暗殺

1964

・2月1日／試験湛水開始
・4月／試験湛水終了
・6月28日／竣工式
・10月1日／ダム完成
ダム管理を開始
横山ダム管理所
に改組

昭和39年

・東海道新幹線開業
・東京オリンピック開催

1965

・管理開始以降最大の流入量を記録(約2,500m³/s)

昭和40年

・名神高速道路が全線開通

1975

・8月／台風6号により洪水調節
最大流入量(約2,340m³/s)

昭和50年

・山陽新幹線岡山―博多間開通

1983

・坂内川貯砂ダム完成

昭和58年

・三宅島大噴火

1990

・横山ダム再開発事業に着手

平成2年

・東西両ドイツが統一

1991

・横山ダム工事事務所に改組

平成3年

・雲仙普賢岳で大火砕流発生

1994

・異常渇水によりダム湖枯渇
・横山ダム完成30周年記念事業

平成6年

・全国で記録的な猛暑、渇水

1997

・「地域に開かれたダム」に指定

平成9年

・消費税5%スタート

用語解説

【湛水】
水を貯めること。ダムが完成した後、
ダムに問題がないかをチェックするため
に貯水することを試験湛水という。



平成6年の渇水状況



ダム左岸法面崩壊



完成した揖斐川貯砂ダム



東横山地すべり



奥いび湖大橋完成

2000

・ダム左岸法面崩壊

平成12年

・シドニーオリンピック開催

2004

・横山ダム再開発事業変更
・ダム周辺環境整備事業終了
・7月／横山ダム完成40周年記念事業

平成16年

・九州新幹線新八代―鹿児島中央間開通

2006

・徳山ダム試験湛水開始
・5月／東横山地すべり

平成18年

・インドネシアのジャワ島中部で地震発生(死者約6,000人)

2001

・揖斐川貯砂ダム完成

平成13年

・米国で同時多発テロ事件

2003

・横山ダム水源地域ビジョン策定

平成15年

・テレビの地上波デジタル放送開始



横山ダム40周年記念事業(ファンタジーホールでのコンサート)

2008

・4月／操作規則、操作細則の変更
・5月／徳山ダム完成
・9月2日／徳山ダム完成後初の連携運用による洪水調節

平成20年

・北京オリンピック開催

2010

・ダム周辺環境整備事業の整備事後評価(了承)

平成22年

・気象庁、113年間で最も暑い夏と発表

2011

・横山ダム再開発事業完了
・木曽川上流河川事務所横山ダム管理支所に改組
・奥いび湖大橋完成

平成23年

・東日本大震災発生



完成した奥いび湖大橋



徳山ダム



横山ダム40周年記念事業(風景画コンクール表彰式)



横山ダム40周年記念事業(あまご放流)



横山ダム50周年記念事業



浮艇庫完成



木曽川水系ダム統合管理事務所、横山ダム管理支所に改組



ダム操作遠隔化のための分室整備完了

2014

・横山ダム完成50周年記念事業

平成26年

・御嶽山噴火

2018

・11月／川尻橋完成

平成30年

・平成30年7月豪雨

2016

・3月／浮艇庫完成
・7月／巡視船「おくいび」更新

平成28年

・熊本地震発生

2020

・11月／新川尻橋撤去

令和2年

・新型コロナ猛威 初の緊急事態宣言

2021

・木曽川水系ダム統合管理事務所
横山ダム管理支所に改組
・ダム操作遠隔化のための
分室整備完了

令和3年

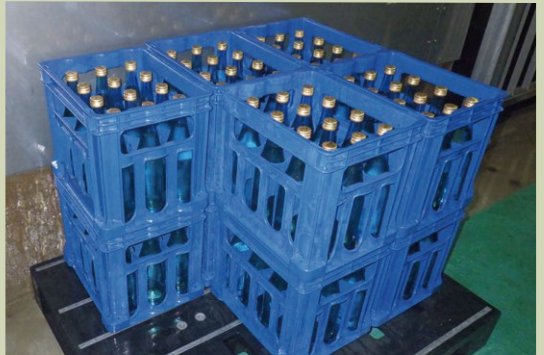
・東京オリンピック 1年延期で開催

2022

・6月／発電に資する放流活用操作
試行運用開始

令和4年

・冬季オリンピックが中国・北京で開催



ダム堤体内での日本酒貯蔵開始

2024

・ダム堤体内での日本酒貯蔵開始
・独立行政法人水資源機構へ
管理委託
・横山ダム60周年記念イベント

令和6年

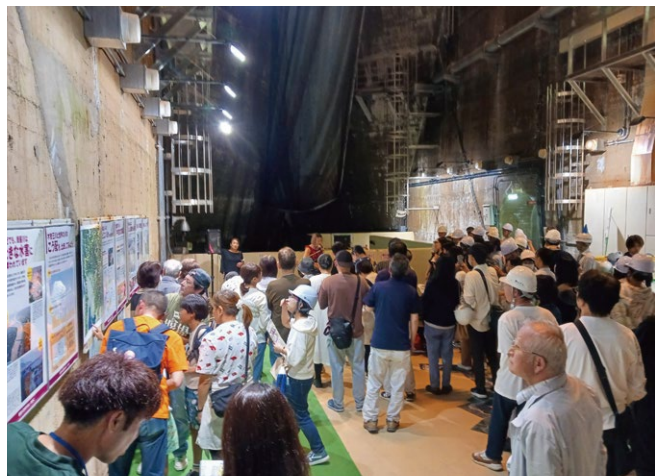
・石川・能登半島で震度7



巡視船「おくいび」更新



新川尻橋撤去



ファンタジーホールでの60周年イベント



60周年を迎えた横山ダムと60周年記念看板

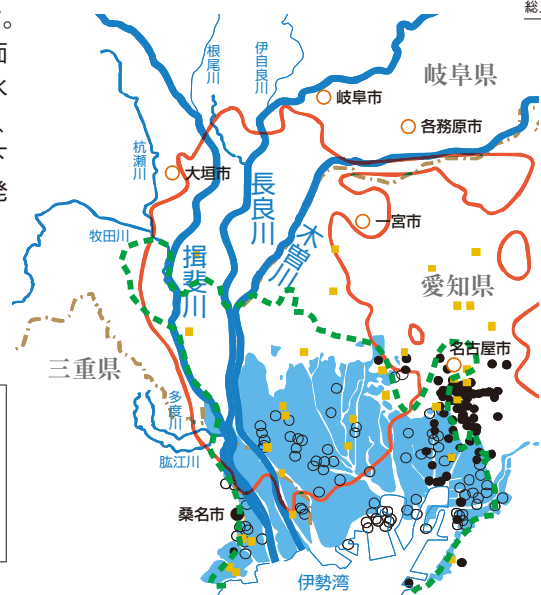
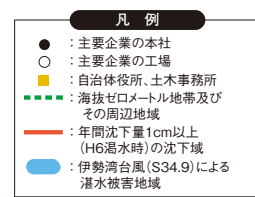
雨が多く、洪水が発生しやすい 揖斐川流域の地域特性

横山ダムのある揖斐川は、滋賀県と福井県に接する岐阜県西部に位置し、水源は岐阜県揖斐郡揖斐川町の冠山で、山々を下って濃尾平野に出て粕川、根尾川と合流して南下、さらに杭瀬川、牧田川、津屋川、大江川、多度川、肱江川を加えて三重県桑名市で長良川と合わせて伊勢湾に注ぐ、幹川流路延121km、流域面積1,840km²の一級河川です。

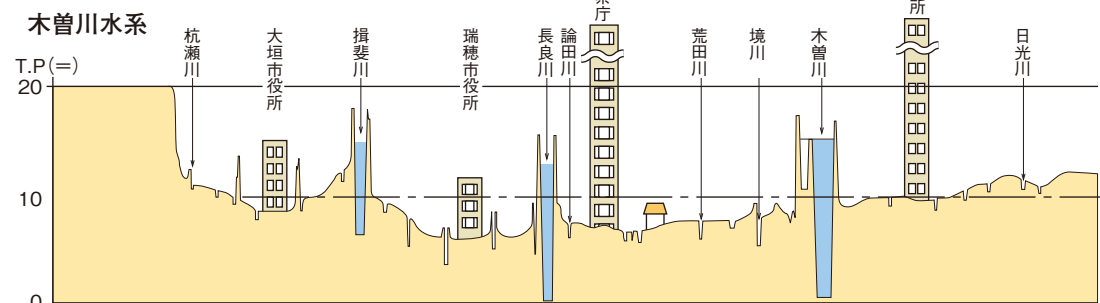
上流部は揖斐県立自然公園、揖斐関ヶ原養老国定公園に指定されており、風光明媚な山間渓谷には年間を通して多くの人々が訪れています。中下流部は、発展する産業経済と農業との調和がとれた岐阜県西濃を中心とした活気あふれる地域です。

■揖斐川下流域の地形特性

- 東・北・西の三方に高い山地が存在し、南側が濃尾平野となっています。
- 下流域は、低平地が広がり、我が国最大規模の海拔ゼロメートル地帯となっています。
- 高度経済成長期には、地下水の過剰な汲み上げ等により地盤が沈下しましたが、現在では地下水の揚水規制が行われ、沈下量は沈静化傾向となっています。
- 沈下した地盤は回復せず、海面下にあることから、堤防が洪水や高潮により決壊氾濫したり、地震により満潮位以下に沈下すれば極めて甚大な被害が発生すると予想されます。



木曽川水系の断面模式図

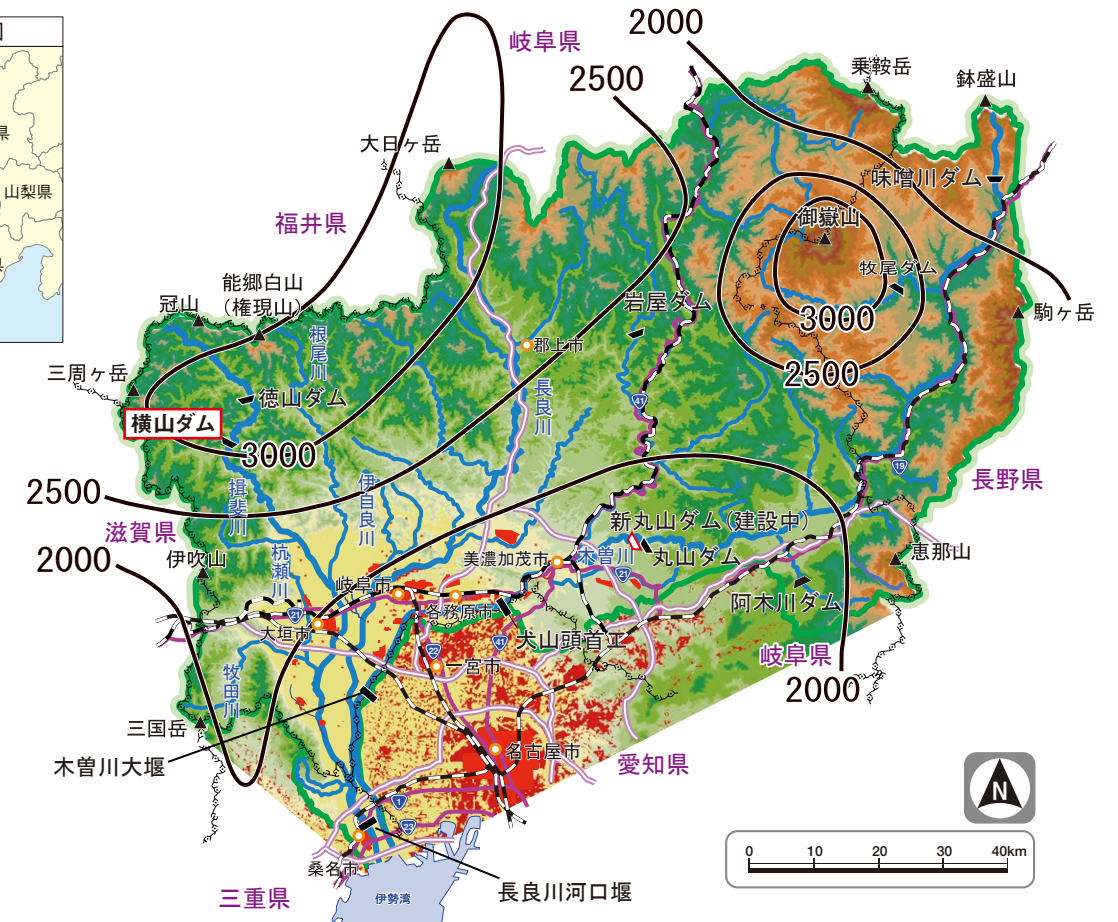


※T.P.:Tokyo Peil (東京湾中等潮位)、地表面の海面からの高さを表す場合の基準となる水準面のこと。

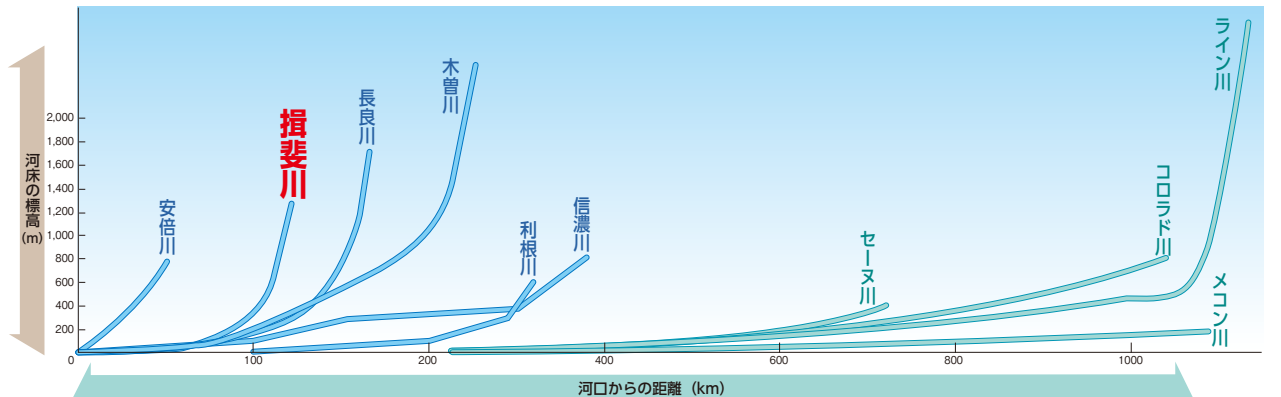
■揖斐川上流域の降雨特性

揖斐川は木曽三川の最も西に位置し、上流域の年平均降水量は3,000mmを超え、木曽三川の中でも最も降水量が多い流域です。また、木曽三川の出水原因の多くが南西から北東に通過する低気圧や台風であることから、降雨は西に位置す

る揖斐川の流域から降り始め、流路延長が短く河道のこう配が急なことから、一般に木曽三川の中で最も早く洪水が発生する傾向にあります。



●木曽三川と世界の川のこう配



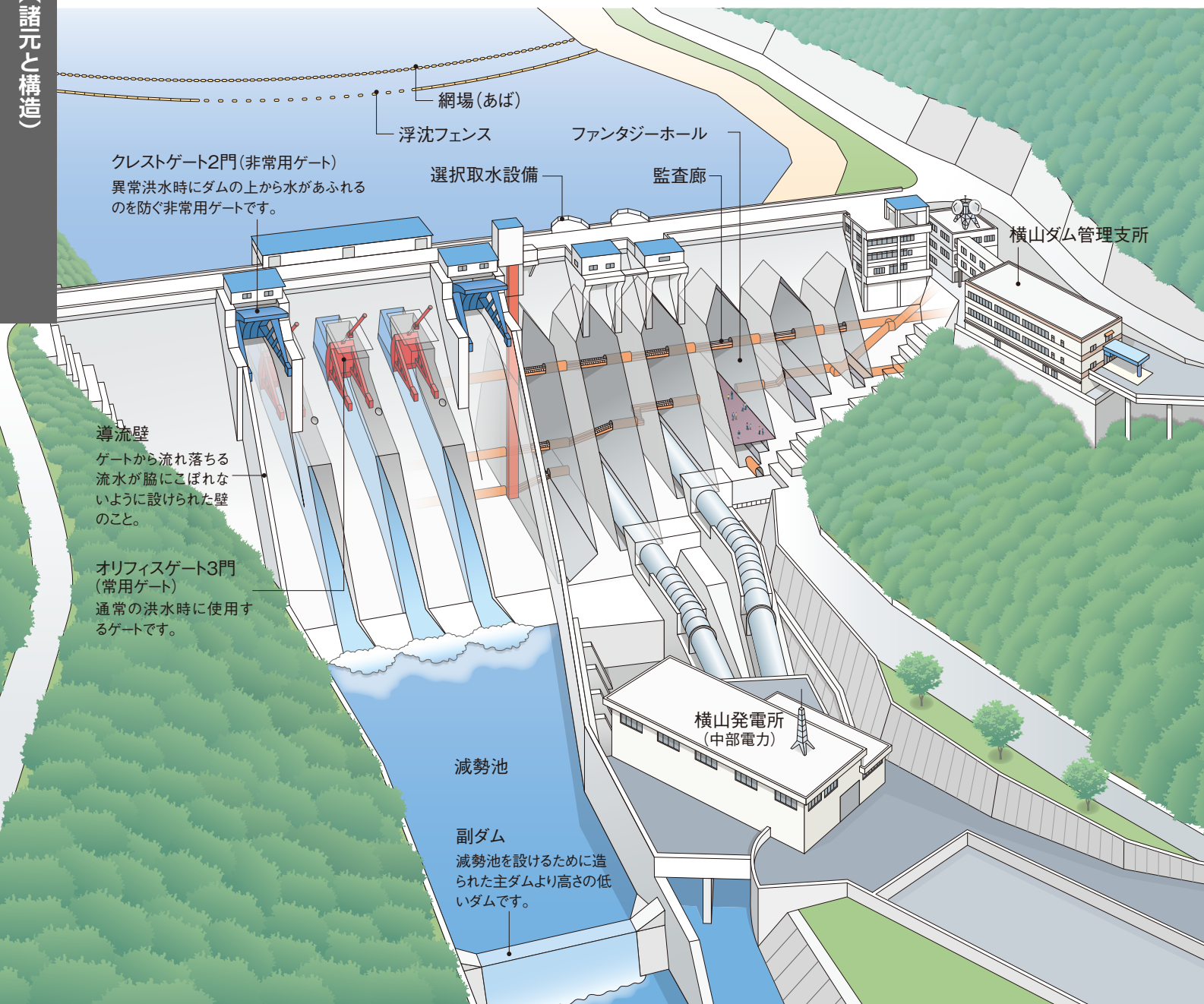
木曽三川 (木曽川・長良川・揖斐川) のなかでも揖斐川は、上流域に降る雨がとて多く、しかも川が急勾配なため、昔から「四刻・八刻・十二刻※」といわれ、木曽三川のなかでも最も早く出水し、洪水を起していました。

しとき はととき じゅうにととき
四刻・八刻・十二刻

雨が降り始めてから洪水になるまでの時間が、揖斐川では四刻 (約8時間)、長良川は八刻 (約16時間)、木曽川は十二刻 (約24時間) かかるという古くからの言い伝え。

出典: 『日本の川を調べる 4東海・近畿の川とくらし』 (理論社)

国内に13基しか見られない、 中空重力式コンクリートダム



●ダム諸元

完成～平成19年度(徳山ダムとの連携運用以前)

形 式	中空重力式コンクリートダム	目 的	F, N, A, W, I, P
堤 高	80.8(m)	総貯水容量	43,000(千m³)
堤 頂 長	220.0(m)	有効貯水容量	33,000(千m³)
堤 体 積	319.8(千m³)	洪水調節容量	22,000(千m³)
流域面積	471.0(km²)	利 水 容 量	14,000(千m³)(洪)
湛水面積	1.7(km²)		33,000(千m³)(非)

平成20年度～(徳山ダムとの連携運用以後)

形 式	中空重力式コンクリートダム	目 的	F, N, A, W, I, P
堤 高	80.8(m)	総貯水容量	40,000(千m³)
堤 頂 長	220.0(m)	有効貯水容量	30,000(千m³)
堤 体 積	319.8(千m³)	洪水調節容量	29,600(千m³)
流域面積	471.0(km²)	利 水 容 量	3,400(千m³)(洪)
湛水面積	1.7(km²)		30,000(千m³)(非)

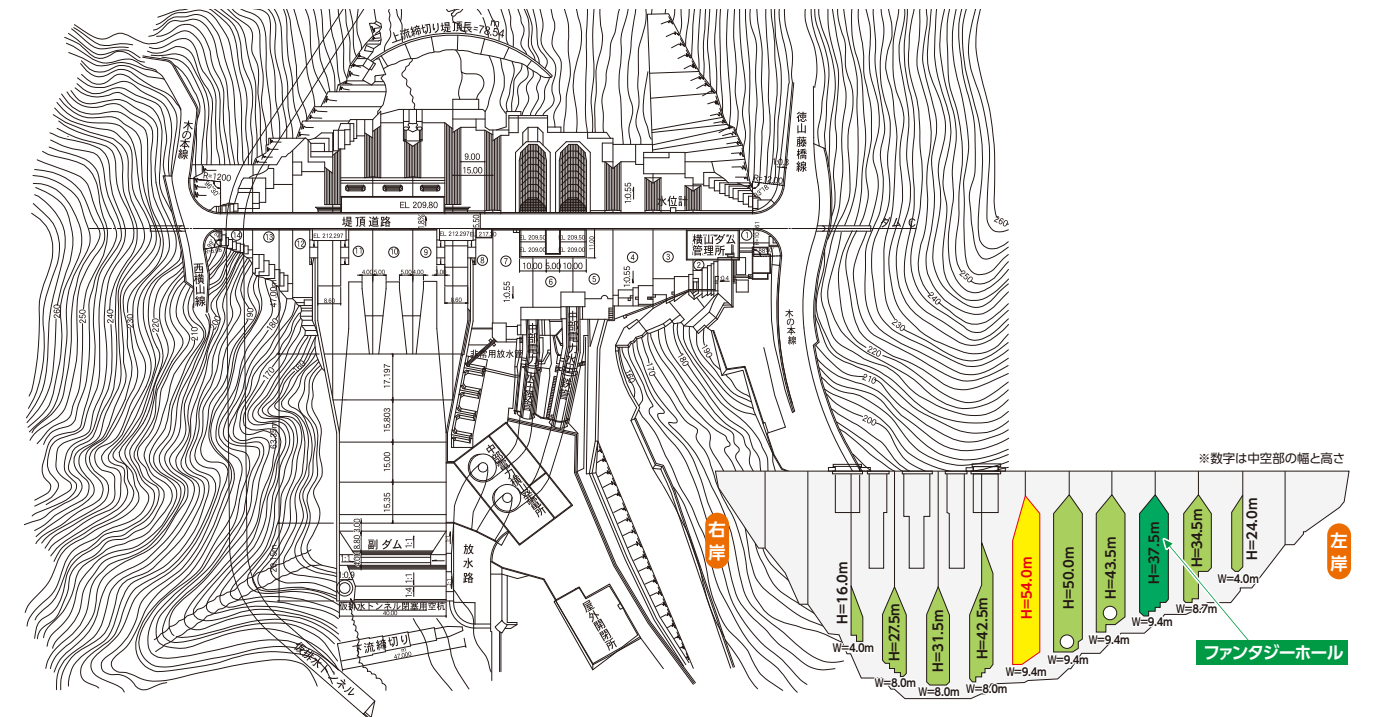
F:洪水調節 N:流水の正常な機能の維持 A:特定かんがい W:上水 I:工水 P:発電

■セメントの使用量を節約した、中空重力式コンクリートダム

横山ダムが計画された当時のセメントは値段が高かったことから、セメントをできるだけ使わない、中に空洞を持つ「中空重力式コンクリートダム」にすることとなりました。空洞があるため、すべてコンクリートできている「重力式ダム」などに比べて重量が軽く、そのため水の力に対抗できるよう、底を広くするこ

とで安定性を確保する工夫がされています。中空重力式コンクリートダムは全国でも13基しかなく、岐阜県では他に飛騨川の高根第2ダムだけです。

横山ダムには10カ所の空洞が設けられていて、その大きさもそれぞれ異なっています。

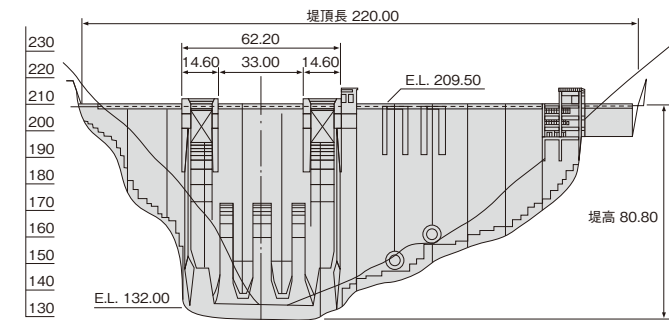


■ダム内の空洞を有効利用

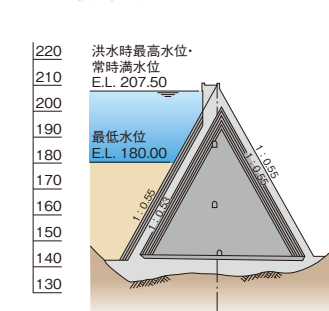
横山ダムでは、ダムの中の大きな空洞を活用して「ファンタジーホール」を設けています。このホールは、ダムの紹介スペースとして有効に利用されています。

また、ダム内部の空洞が地下秘密工場の雰囲気になさわしいということから、映画のロケが行われたこともあります。

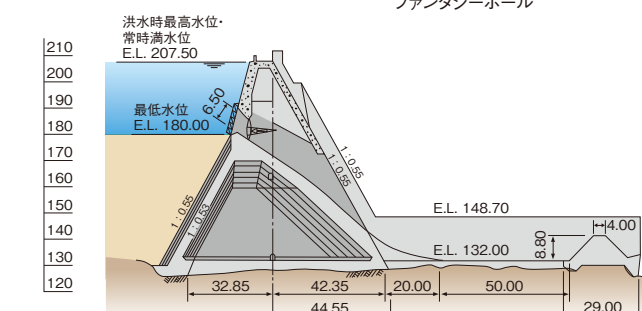
●ダム下流面図



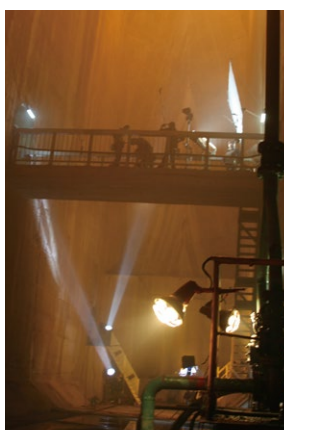
●一般部断面図



●放流設備がある部分の断面図

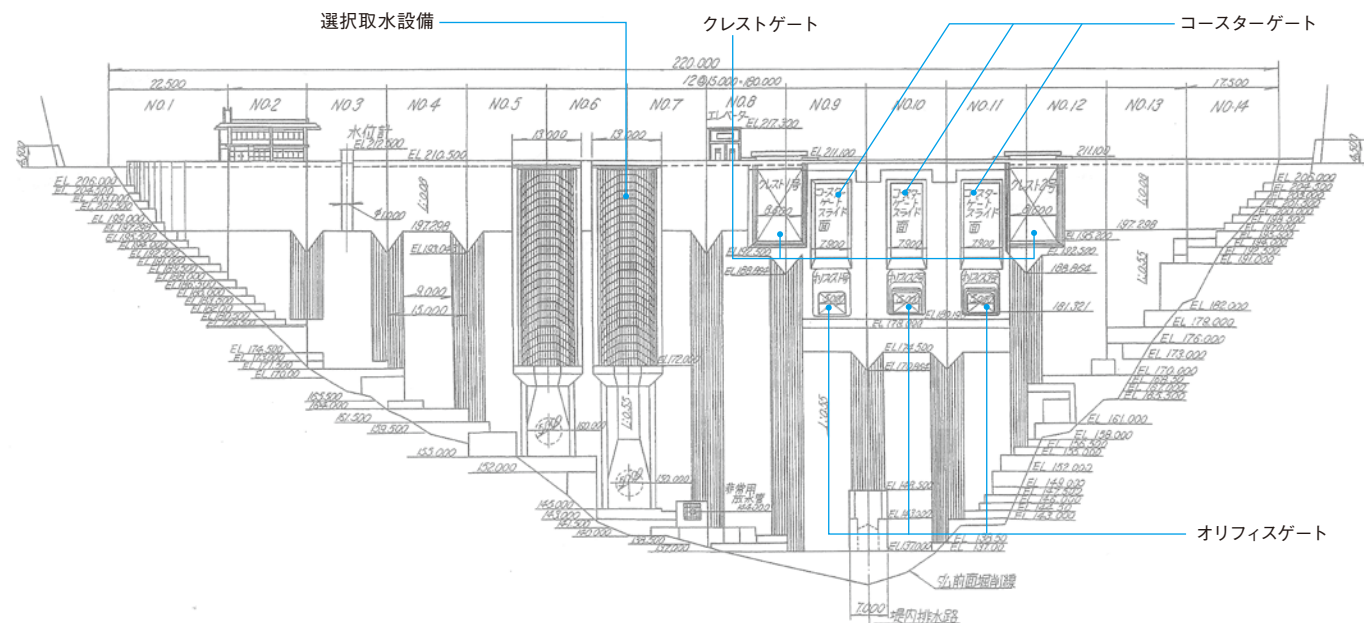


ファンタジーホール



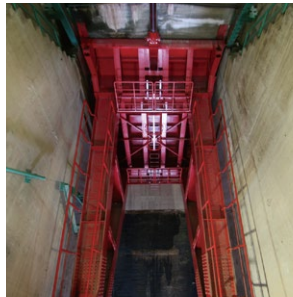
ダム内部を使った映画撮影

様々な設備で確実なダム操作を実施



■主放流設備(オリフィスゲート)

通常洪水時に使用するゲートで、形式は鋼製のラジアルゲートです。ラジアルゲートとは堤体に固定された軸の回転により上下する円弧形のゲートです。操作時の水深が深くなるため、大きな開閉力が期待できる油圧シリンダ式開閉装置を採用しています。



●オリフィスゲート施設概要

形 式	ラジアルゲート
設 置 数	3門
扉体寸法	径間5.0m 扉高6.4m
開閉速度	0.3m/min
水密方式	四方水密
開閉装置	油圧シリンダ式
完成年月	昭和39年3月

■非常用放流設備(クレストゲート)

異常洪水時に対応するゲートで、形式はオリフィスゲートと同じラジアルゲートです。オリフィスゲートとは違い、ゲートに接続されたワイヤーロープをウィンチドラムで巻き取る事でゲートを動かします。



●クレストゲート施設概要

形 式	ラジアルゲート
設 置 数	2門
扉体寸法	径間 8.6m 扉高 13m
開閉速度	0.3m/min
水密方式	三方ゴム水密
開閉装置	ワイヤーロープウィンチ式
完成年月	昭和39年3月

■主放流予備ゲート設備(コースターゲート)

オリフィスゲートを点検する際、ゲートを開けても水を流さないフタの役目をはたします。



●コースターゲート施設概要

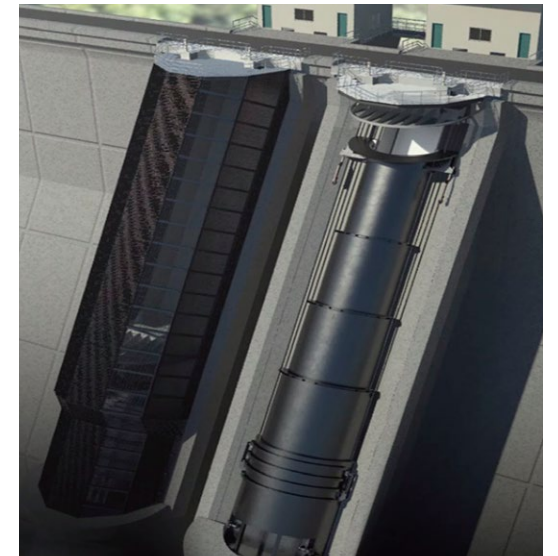
形 式	ローラゲート
設 置 数	3門
扉体寸法	径間 7.4m 扉高 9.352m
開閉速度	0.3m/min
水密方式	四方水密
開閉装置	ワイヤーロープウィンチ式
完成年月	昭和39年3月

■選択取水設備

ダム湖の水は、水深で水温や水の濁りが異なります。取入口が上下する選択取水設備を使って、適切な水深から水を取り入れ、下流に流します。設備の老朽化や徳山ダム完成に伴う新たな貯水池運用に対応するため、平成23年3月に全面更新しました。

●選択取水設備施設概要

形 式	半円形多段式ローラゲート(傾斜式)
設 置 数	1門(5段)
扉体寸法	純径間 4.300m 扉高 39.391m (1段扉) 半径 2.630m 扉高 9.558m (2段扉) 半径 2.980m 扉高 6.655m (3段扉) 半径 3.330m 扉高 6.655m (4段扉) 半径 3.680m 扉高 6.655m (5段扉) 半径 4.030m 扉高 9.868m
開閉速度	0.3m/min
水密方式	前面3方ゴム水密
開閉装置	ワイヤーロープウィンチ式
完成年月	平成23年3月



■網場(あば)

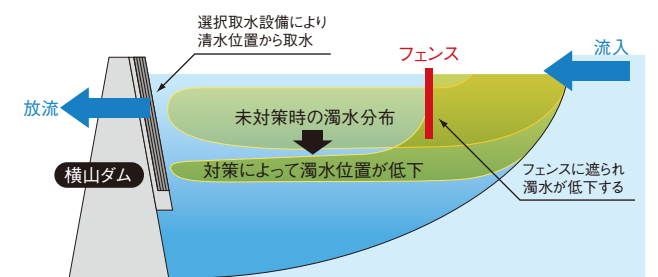
ダム湖内に入り込んできた流木やゴミなどをせき止め、ゲートなどのダム施設を守ります。



■浮沈フェンス

貯水池の濁りや水温に応じて操作します。選択取水設備と組み合わせることで、下流に流す水の濁りを軽減します。

●浮沈フェンスによる濁水対策の原理



■ブラムライン

ダムの変形、変位をブラムライン(懸垂線)を応用して測定する装置です。



■監査廊

堤体内を観察するためにダム堤体内につくられた通路。通廊とも呼びます。



■漏水計

ダム堤体内に設置した漏水計で、ダム堤体の漏水や湧水を測定しています。



防災操作（洪水調節）と利水を行う 多目的ダム

当初は、洪水調節と利水（灌漑用水の供給、発電）を目的として建設された横山ダムですが、平成20年の徳山ダム完成により灌漑用水の供給は徳山ダムに移行させ、以降洪水調節と発電を目的とするダムへと変わりました。

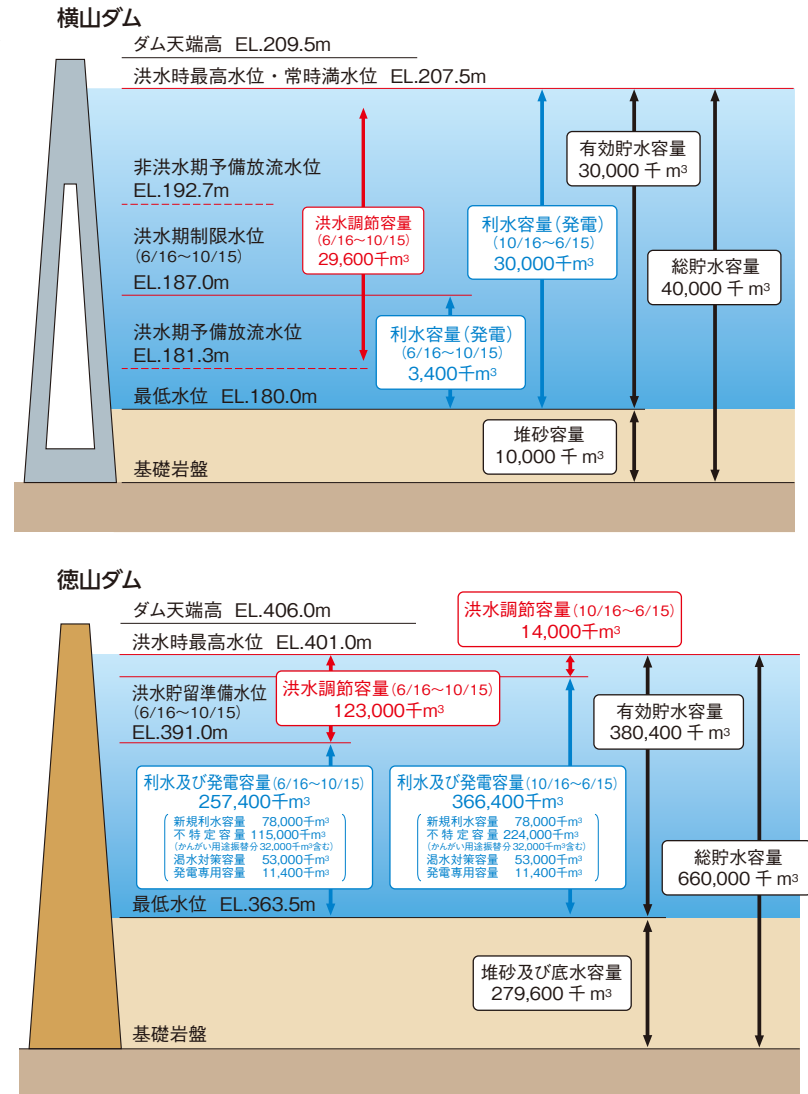
●徳山ダムとの連携運用

横山ダムと徳山ダムでは、二つのダムを連携させて下流の洪水を軽減するために最も効果のある操作規則を定めています。



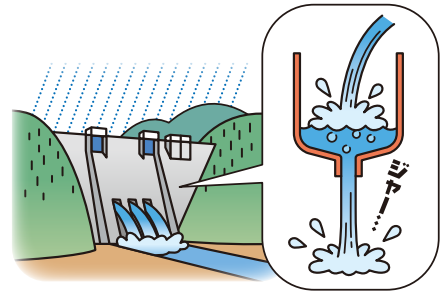
徳山ダム

●貯水池容量配分図



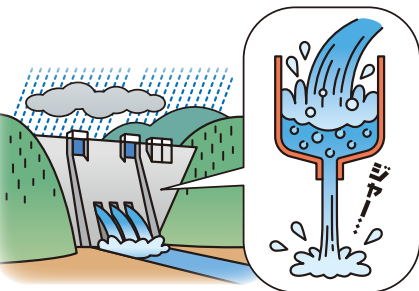
ダムが行う洪水調節のイメージ

1 洪水の初期



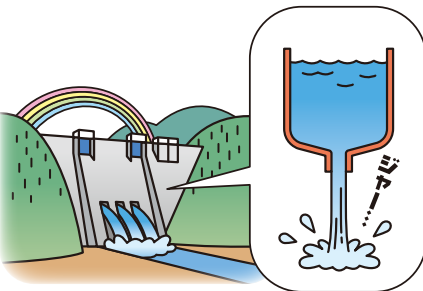
ダム湖に入ってくる量と同じ量を下流に流します。

2 洪水中



ダム湖に入ってくる量を一部ためこみ、少ない量を下流に流すことにより下流への負担を軽減します。

3 洪水が過ぎたら



次の洪水に備えてダム湖にたまった水を減らしていきます。

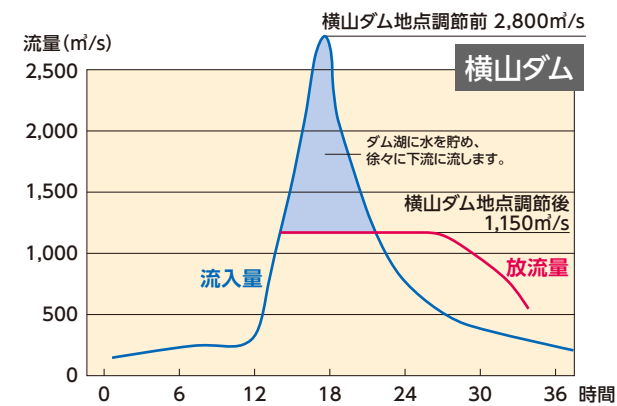
ダムの目的 ①洪水調節

■連携運用前の洪水調節計画 (完成～平成19年度)

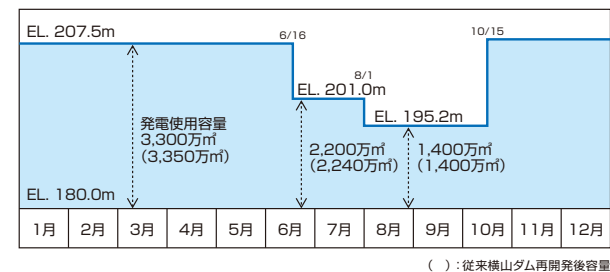
徳山ダムとの連携運用前の横山ダムの洪水調節方式は、流入量が1,150m³/sを超えた後は、流入量がいったん最大に達し、その後1,150m³/sに減水するまで1,150m³/sの流水を放流する、一定放流の調節方式です。

これによって、横山ダム地点の計画高水流量2,800m³/sの内の1,650m³/sを調節し、上流ダム群と併せて揖斐川の治水基準点(万石地点)の基本高水流量6,300m³/sを、3,900m³/sに低減させる計画としていました。

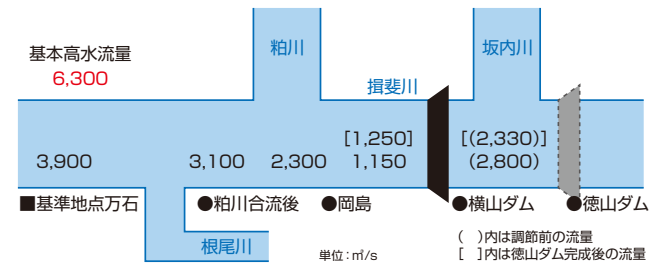
●横山ダム洪水調節計画



●制限水位



●流域配分図

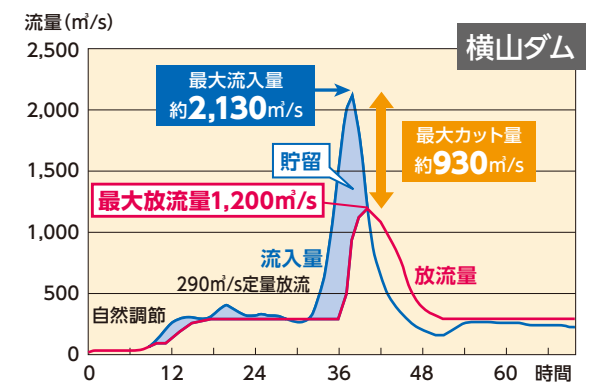


■連携運用後の洪水調節計画 (平成20年度～)

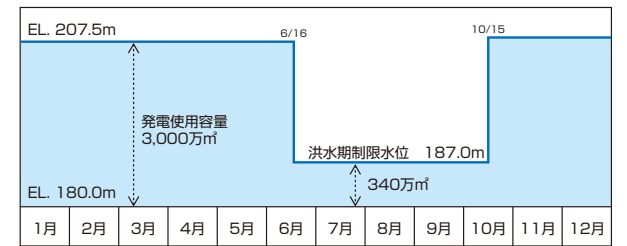
徳山ダムとの連携運用後の横山ダムでは、流入量290m³/s以上を洪水と定義し、徳山ダムと横山ダムの2ダムによる連携運用で貯水位に応じて放流方法を規定する「貯水位対応放流」による洪水調節方式となりました。

これによって、上流の徳山ダム調節後の横山ダム地点における計画高水流量2,130m³/sの内、930m³/sをダムで調節し、ダムからは最大1,200m³/sを放流します。この洪水調節により徳山ダムと併せて下流揖斐川の治水基準点(万石地点)の基本高水流量6,300m³/sを3,900m³/sに低減させる計画です。

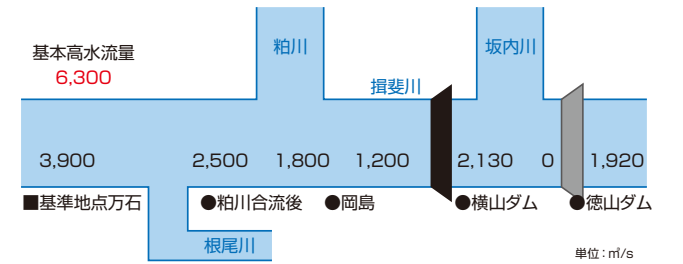
●横山ダム洪水調節計画



●制限水位



●流域配分図



ダムの目的 ②灌漑用水の供給

■8,798haの土地に灌漑用水を補給

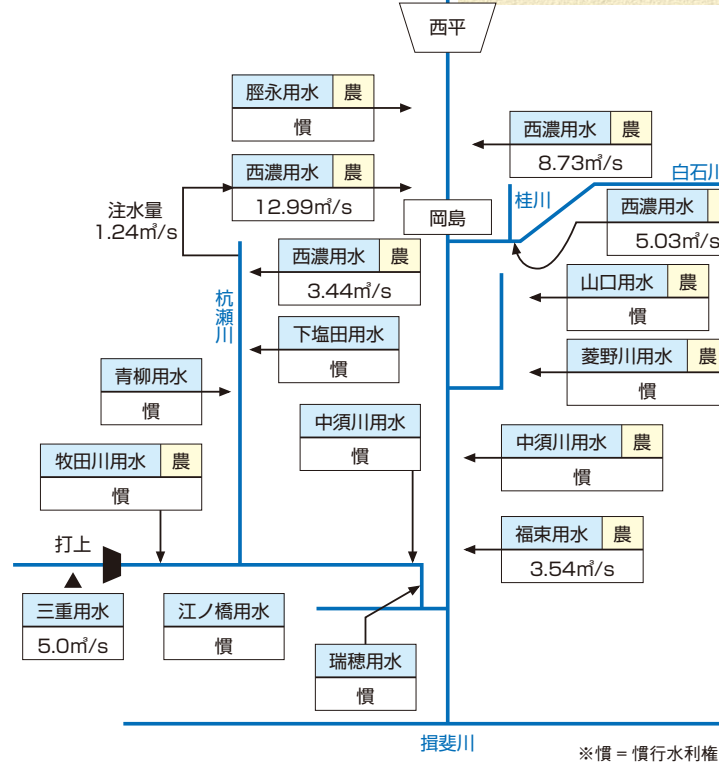
揖斐川中流部の農地は揖斐川の支川やため池・湧水、あるいは井戸に頼っていましたが、扇状地域では灌漑用水の漏水がはなはだしい上に、渇水時には本川・支川の流量が不足し、下流の輪中低湿地地帯では乾田化の拡大に伴い、しばしば用水不足に悩まされてきました。これに加えて、工業の発展に伴い地下水の利用が増加し、地下水位の低下が水不足に拍車をかけることになり、抜本的な対策が求められていました。

これらの対策として、揖斐川上流に建設される横山ダムに水源を求め、揖斐川町岡島地点に頭首工を設けて取水の安定を図るとともに、揖東幹線・揖西幹線・西部幹線など用水路の全面改装を目的とした西濃用水事業を昭和43年に着工し、昭和57年に完成しました。

これにより、平成20年5月の徳山ダム完成まで、横山ダムからの流水を利用して最大23.35m³/sの取水を行い、大垣市外6町の8,798haの土地へ灌漑用水の補給を行っていました。

現在は灌漑用水の機能を徳山ダムに移行しました。

●揖斐川流域水使用模式図



※慣 = 慣行水利権



岡島頭首工

ダムの目的 ③発電

■最大出力70,000kwを発電

揖斐川上流の山間部には水力エネルギーが包蔵されている一方で、下流の平野部には大垣市や桑名市を中心とした産業交通の発達した重要地域が展開しています。そのため、揖斐川流域では活発な電源開発が進められていました。横山ダム建設に伴う発電計画では、昭和34年の第26回電源開発調整審議会

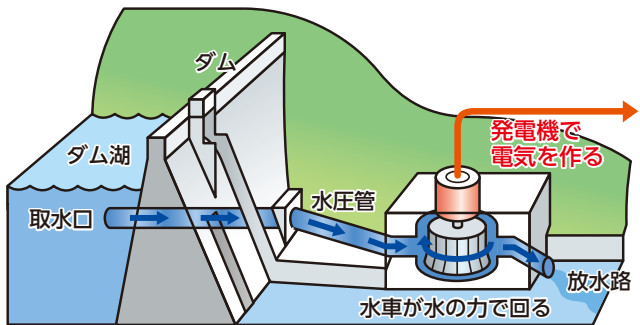
において最大出力35,300kWの横山発電所の計画が了承されました。その後、将来上流に開発を予想される徳山貯水池計画との関連と、当時の電力需要を考慮して、最大出力70,000kWに変更することが、昭和37年の第33回電源開発調整審議会です承されました。



■クリーンに電気をつくる水力発電

横山ダムでは、最大時には毎秒129m³の水で70,000kWの電気を起こすことができます。ちなみに、70,000kWとは、約2万4千世帯の家庭で使われる電気量に匹敵します。

水の力を利用して電気をつくる「水力発電」は、石油や石炭、LNGなどを燃やして電気をつくる火力発電はもちろんのこと、風力発電や太陽光発電と比べて、二酸化炭素の排出量が一番少ない、クリーンで、環境に優しい発電システムです。



●発電所の諸元

歴 史	所有：中部電力〔運用開始〕—中部電力〔現在〕 昭和39（1964）年4月：運用開始
出 力	認可最大出力：70,000kW 常時出力：800kW 年間発電電力量：130,000MWH（1億3千万キロワット時）
水 量	最大使用水量：毎秒129.00m³
落 差	有効落差：63.30m
設 備	水車：立軸フランシス水車×2台 総出力37,000kW
標 高	取水位標高：207.50m 放水位標高：139.50m

迅速・確実な管理で 下流域の洪水被害軽減を図る

ダム管理には洪水時の「高水管理」と、ダム機能を維持するための「日常管理」の2つがあります。適切なゲート操作を行うことでダム下流域を洪水被害から守ることが「高水管理」の最大の目的であり、こうした緊急時にダム機能が最大限発揮されるようダム堤体やゲートの設備点検・貯水池の巡視などを行うことが「日常管理」です。

横山ダムの業務（令和6年度から水資源機構へ管理委託）

■横山ダムの2つの管理

- 高水管理** 梅雨や台風などで大雨が降ったとき、適切な洪水調節を行い、ダム下流の洪水の被害を軽減します。
- 日常管理** いつでも本来のダム機能が発揮できるよう、ダム堤体やゲートなどの設備点検、貯水池の巡視などを行います。

事務担当

- 高水管理** ダムからの放流を知らせる警報サイレンが正常に作動しているか、川の中に人が入っていないか等を確認するため、ダム下流のパトロールを行います。

- 日常管理** 庁舎管理や職員の健康管理等のほか、河川法に基づく許認可申請の審査等を行っています。また、見学を希望される方の案内や取材対応など、横山ダムを広く知っていただくための広報業務もを行っています。



土木担当

- 高水管理** 雨量予測や河川の流量等を考慮し、ダムの操作を行います。上下流のダムや関係機関との連絡調整も担当します。

- 日常管理** ダム堤体内や貯水池の巡視を行い、問題がある箇所については発注準備や関係機関との調整を行い、速やかに修繕を行います。また、ダムの維持管理に関わる工事の監督を担当し、いつでもダムが本来の力を発揮できるようにします。



横山ダム管理庁舎玄関

機械担当

- 高水管理** ゲート放流を行う前に、ゲートや油圧に異常がないか点検を行います。
- 日常管理** ゲート設備、浮沈フェンス等、機械関係の管理を行っています。機械設備が本来の機能を発揮できるように、点検や補修計画の立案、工事の監督業務を行います。



放流前のゲート点検

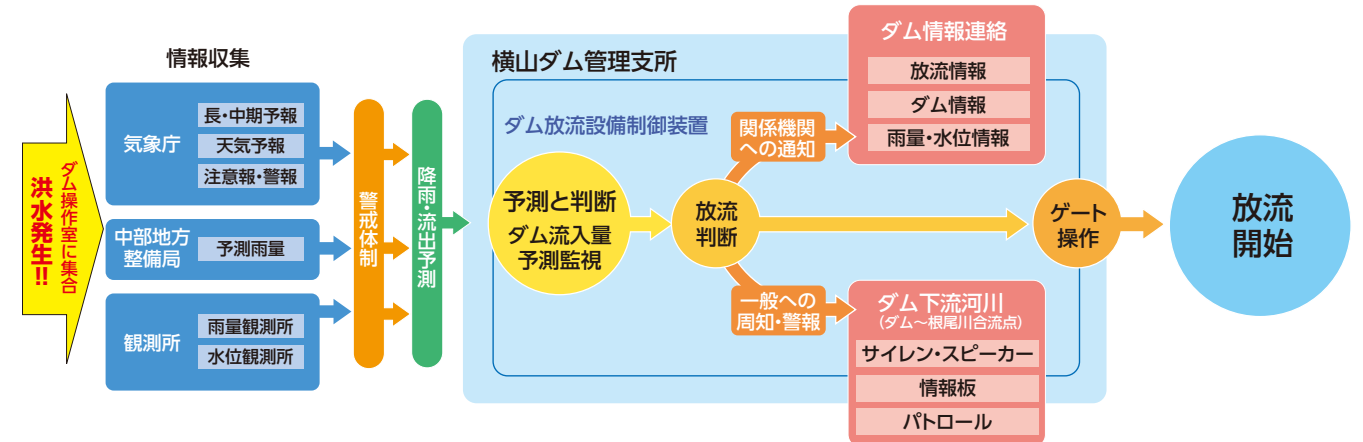
電気担当

- 高水管理** 警報サイレンの稼動、表示板の表示・制御などを行います。
- 日常管理** ダム関連の電気通信設備、警報設備、各種表示施設の管理を行っています。各設備の状況を把握し、事前に修繕作業を施すことで、トラブルの発生を未然に防ぎます。また、今後の設備改修や設備の導入計画の立案も行います。



通信機器の点検

洪水時のダム管理フロー



管理設備



総合気象観測装置

風量計・雨量計・温湿度計を使って、ダム管理に必要な気象情報を観測します。



水質観測所

ダム湖の水質を管理するため、流れ込む河川水の水質を観測しています。



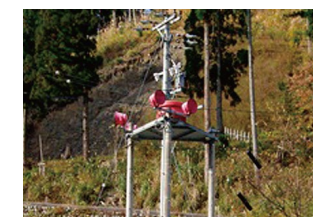
水位観測所

ダム湖に流れ込む川の水位を計測しています。



水位計

貯水池の水位を知るための計器。横山ダムではフロートと呼ばれる浮きの上下によって、直接水位を記録することを基本としています。



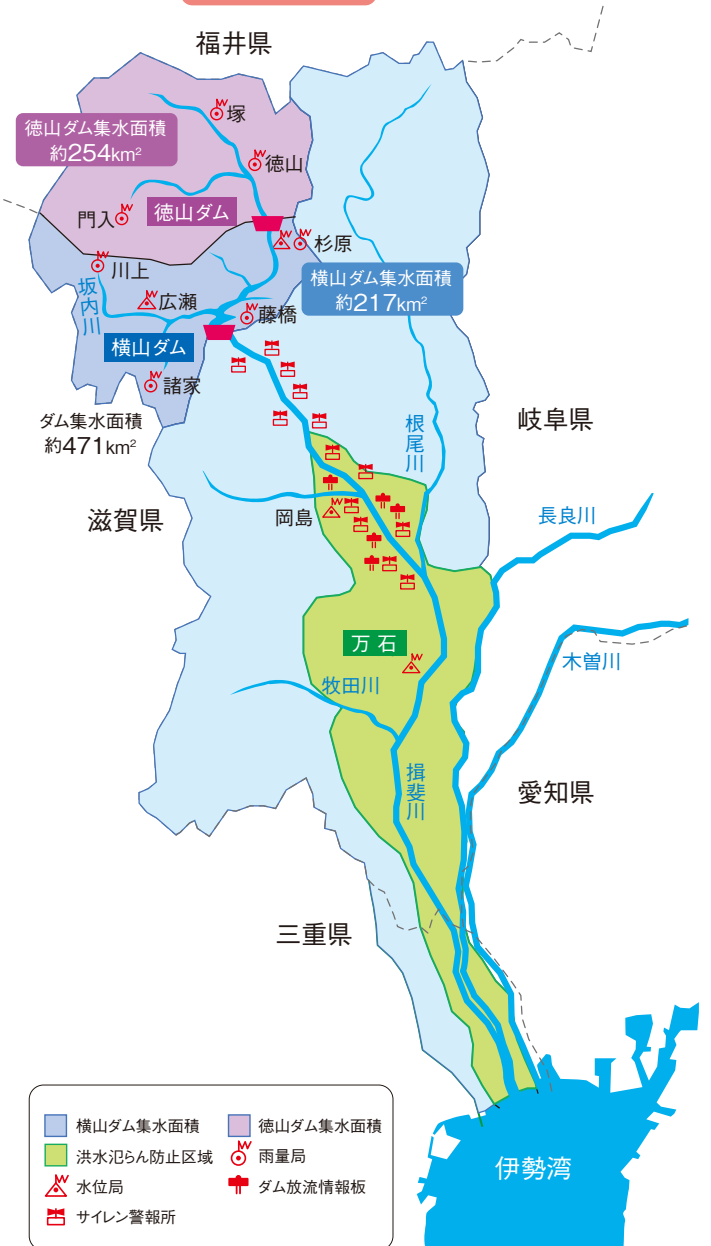
警報局

ダムから放流を行う場合にサイレンを鳴らしてお知らせします。



情報板

河川利用の安全向上を目指すために、ダム放流や気象情報を表示します。



洪水とのたたかい

雨が降り始めて短時間で洪水になるという地形や自然環境をもつ揖斐川は、長い年月にわたって水害に苦しめられてきました。



昭和51年9月12日 水防状況（杭瀬川祖父江地先）



昭和34年9月 伊勢湾台風

和歌山県潮岬に上陸した台風15号は、低気圧と激しい風による海面上昇が驚異的な高潮を発生させ、伊勢湾一帯を襲い、大災害をもたらしました。



平成14年7月 台風6号

中部・関東・東北・北陸地方などに多大な被害をもたらしました。揖斐川の万石地点及び牧田川の烏江地点では、計画高水位を上回る近年まれに見る大出水となりました。



昭和50年8月 台風6号

揖斐川の万石地点（横山ダムより約40km下流）では、堤防の計画を上回る水位を記録。この時、横山ダムの洪水調節により河川水位を低下させることができました。



平成16年10月 台風23号

東海地方で総雨量が300mmを超え、各地で浸水被害が発生。中部地方の一般被害は、死者7名、行方不明者2名、負傷者43名等、大きな被害をもたらしました。

■揖斐川流域の過去の主な洪水状況

発生年月	原因	雨量(mm) (藤橋地点)	被害状況(内水被害含む)			
			死者・行方不明者 (人)	浸水家屋	浸水面積	備考
S34年8月	台風7号	590*	2	8,400戸		※徳山地点雨量
S34年9月	台風15号(伊勢湾台風)	411*	29	15,000戸		
S35年8月	台風11号	519*				
S36年6月	梅雨前線	587*	22	13,366棟	10,372	
S40年9月	台風23、24号	1,211*	1	約460戸		
S47年9月	台風20号	279	1	約460戸		
S50年8月	台風6号	305		215棟	188	
S51年9月	台風17号	537	1	18,286棟	7,685	
S54年9月	台風12号	190				
H2年9月	台風19号	462	1	1,326棟	550	
H6年9月	台風26号	150				
H10年9月	台風7、8号	234				
H14年7月	台風6号	317		738棟	857	
H16年10月	台風23号	333	1	約260棟	468	
H20年9月	西濃集中豪雨	369		176棟		
H24年9月	台風16号(温帯低気圧)	406.8		12棟		※横山ダム流域 平均雨量
H26年8月	台風11号	392.3				
H29年10月	台風21号	311.7				
H30年9月	台風24号	187.1				
R2年7月	豪雨	572.9				
R5年8月	台風7号	335.1		1棟		
R6年8月	台風10号	281.1		154棟		

（平成16年 岐阜県データを加工、平成20年 新聞記事）（平成24年以降の被害状況は岐阜県データから）

■洪水調節を行った洪水

昭和39年10月から管理を開始した横山ダムでは、管理開始から令和6年まで、以下の洪水に対して洪水調節を行っています。

●横山ダム洪水調節実績一覧表

調節 年月日	原因	最大流入量 (m/s)	最大流入時 放流量(m/s)	調節量 (m/s)
S40.9.10	台風23号	1,188.00	500.41	687.59
S40.9.14	台風23、24号	2,496.38	1,147.00	1,349.38
S47.9.16	台風20号	1,476.67	1,344.55	132.12
S50.8.23	台風6号	2,337.02	1,370.99	966.03
S54.9.4	台風12号	1,171.85	215.79	956.06
H6.9.30	台風26号	1,225.35	1,147.32	78.03
H10.9.22	台風7、8号	1,596.00	1,148.00	448.00
H10.10.18	台風10号	1,302.43	1,145.24	157.19
H16.10.20	台風23号	1,568.21	924.56	643.65
H20.9.2	低気圧	692.91	285.30	407.61
H22.7.15	梅雨前線	351.84	286.87	64.97
H23.9.4	台風12号	360.29	287.78	72.51
H23.9.19	台風15号	491.84	287.87	203.97
H24.9.18	台風16号・前線	643.84	288.50	355.34
H25.7.29	前線	303.95	284.70	19.25
H25.9.16	台風18号	460.12	283.24	176.88
H26.3.30	前線	310.16	124.57	185.59
H26.8.10	台風11号	924.78	285.81	638.97
H27.4.3	融雪	295.10	287.98	7.12
H27.7.17	台風11号	377.71	283.30	94.41

調節 年月日	原因	最大流入量 (m/s)	最大流入時 放流量(m/s)	調節量 (m/s)
H28.9.20	台風16号	304.10	192.65	111.45
H29.4.17	前線	336.78	288.62	48.16
H29.8.7	台風5号	485.91	211.24	274.67
H29.10.22	台風21号	545.60	288.28	257.32
H30.3.5	前線・融雪	310.54	121.05	189.49
H30.7.6	台風7号・前線	417.43	287.00	130.43
H30.8.24	台風20号	413.72	238.50	175.22
H30.9.4	台風21号・前線	691.26	285.51	405.75
H30.9.30	前線・台風24号	511.57	287.57	224.00
R1.8.16	台風10号	428.21	288.24	139.97
R2.7.6	前線	603.70	286.85	316.85
R3.8.13	前線	328.90	286.10	42.80
R4.8.4	前線	299.79	289.54	10.25
R4.8.14	台風8号	299.81	81.85	217.96
R5.6.29	前線	328.55	104.18	224.37
R5.7.13	前線	330.73	193.35	137.38
R5.8.15	台風7号	806.54	287.74	518.80
R6.6.23	梅雨前線	372.19	286.65	85.54
R6.8.31	台風10号	456.38	264.72	191.66

*平成19年までは、流入量1,150m³/sを超える場合を洪水とする
*平成20年度より操作規則改定にともない流入量が290m³/sを超える場合を洪水とする

横山ダムでは昭和53年にただし書き操作要領を策定（昭和59年に改訂）していますが、策定後ただし書き操作を実施したことはありません。

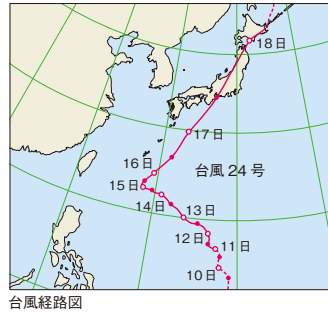
ただし書き操作とは、計画時に想定された規模以上の洪水が発生し、気象、水象その他の状況により特に必要と認める場合に実施する特別な放流操作で、流入量と等しい量を放流します。

昭和40年 台風24号

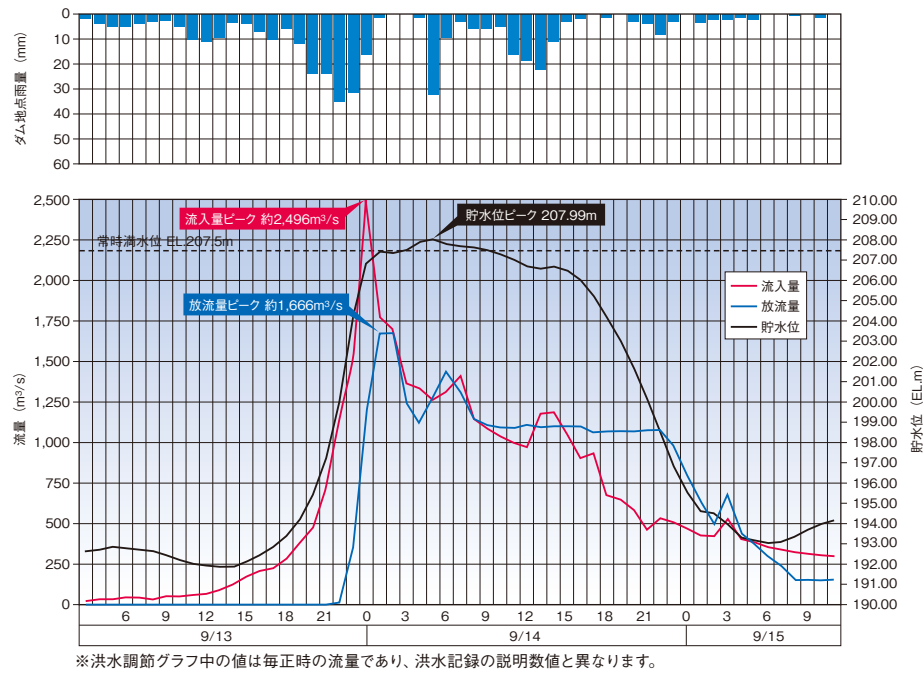
■洪水記録

- 昭和40年9月14日から16日にかけて秋雨前線豪雨及び台風24号による洪水に見舞われました。観測した総雨量は397mm、横山ダムの最大流入量は9月14日の22時22分に毎秒約2,500m³、最大放流量は毎秒約2,000m³を記録しました。
- ダム貯水位は最高207.99mを記録し計画規模を上回る洪水でした。
- 横山ダムの防災操作により、横山ダムが無い場合と比較して揖斐川の水位低下効果は大垣市万石地点（河口から40.6km）で約1.2mと試算しました。

※当時は、ただし書き操作要領は策定されていません。



●昭和40年9月14日 洪水調節図



※洪水調節グラフ中の値は毎正時の流量であり、洪水記録の説明数値と異なります。

洪水調節による
水位低下(試算)

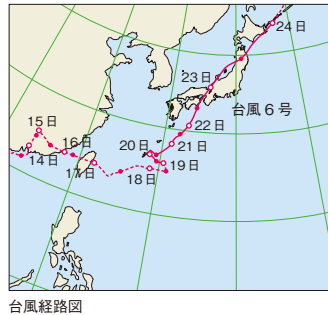
大垣市万石地点
約 **1.2m**

昭和50年 台風6号

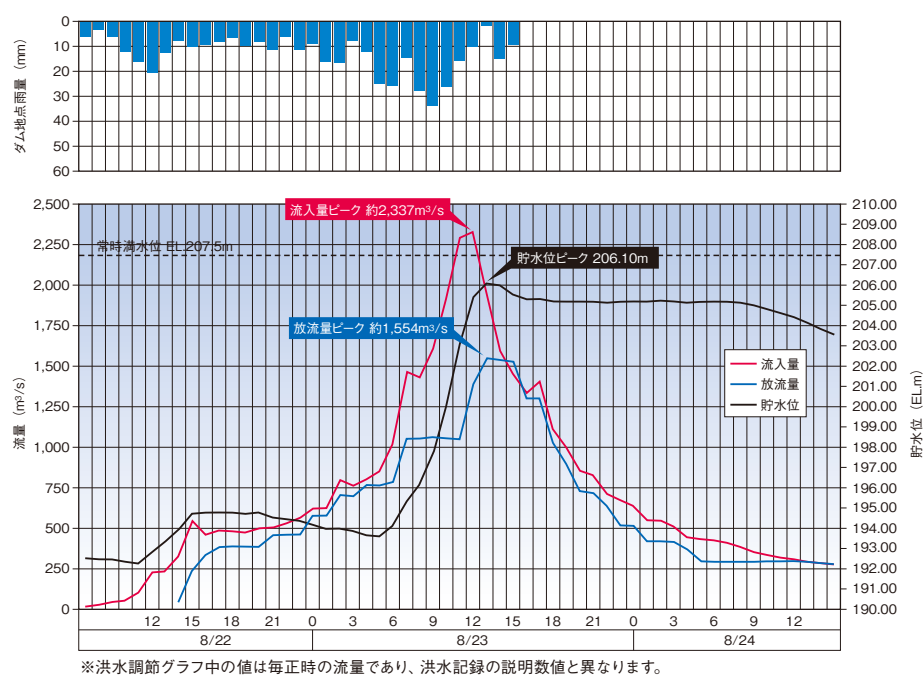
■洪水記録

- 昭和50年8月21日から23日にかけて台風6号の影響による降雨により最大流入量は8月23日12時00分に最大流入量は毎秒約2,340m³、最大放流量は毎秒約1,660m³を記録しました。
- 横山ダムの防災操作により、横山ダムが無い場合と比較して、揖斐川の水位低下効果は大垣市万石地点（河口から40.6km）で約1.2mと試算しました。

※当時は、ただし書き操作要領は策定されていません。



●昭和50年8月23日 洪水調節図



※洪水調節グラフ中の値は毎正時の流量であり、洪水記録の説明数値と異なります。

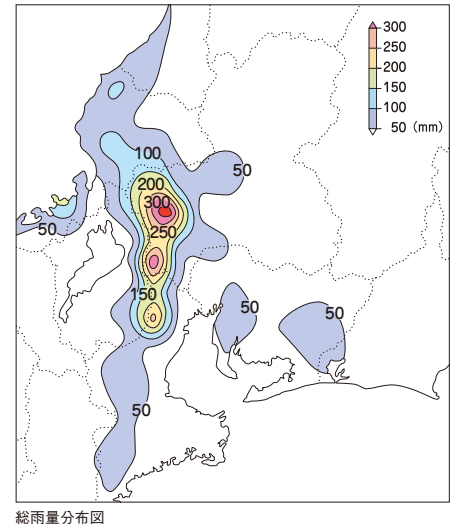
洪水調節による
水位低下(試算)

大垣市万石地点
約 **1.2m**

平成20年 西濃豪雨

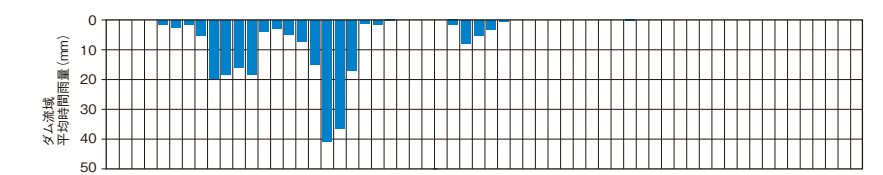
■洪水記録

- 平成20年9月2日から3日にかけて、岐阜県西濃地域は激しい降雨に見舞われ、徳山ダム（河口から約90km）では、最大毎秒約740m³の流入量全量を貯留しました。また、横山ダム（河口から約80km）では、最大毎秒約690m³の流入量があり、このうち毎秒約400m³を貯留し、毎秒約290m³を放流しました。
- この洪水調節により、横山ダムと徳山ダムの連携運用がなかった場合の操作に比べ、揖斐川の水位低下効果は、大垣市万石地点（河口から40.6km）で約1.2mと試算しました。

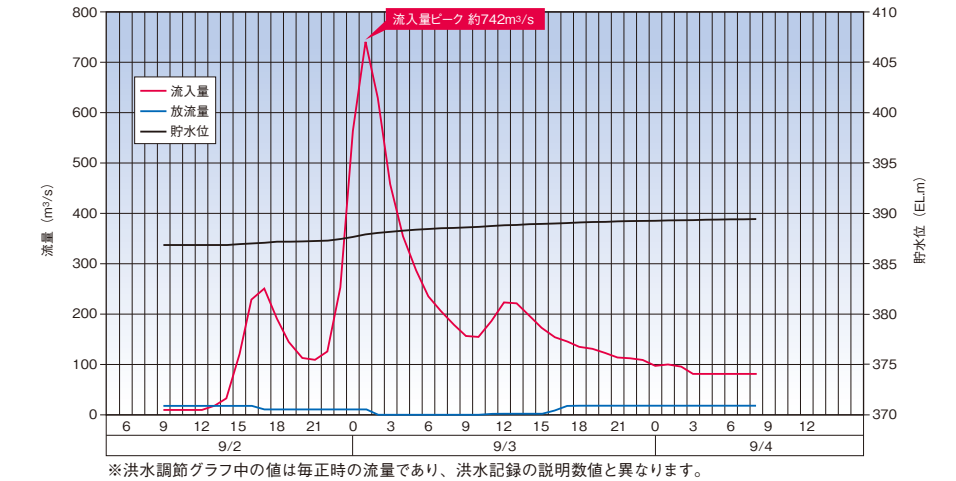


総雨量分布図

●平成20年9月2日 洪水調節図

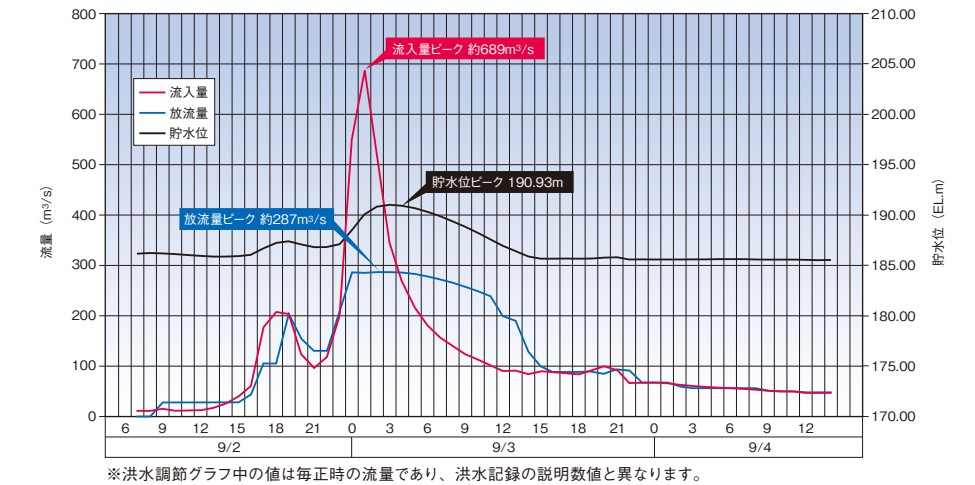


徳山ダム洪水調節図



※洪水調節グラフ中の値は毎正時の流量であり、洪水記録の説明数値と異なります。

横山ダム洪水調節図

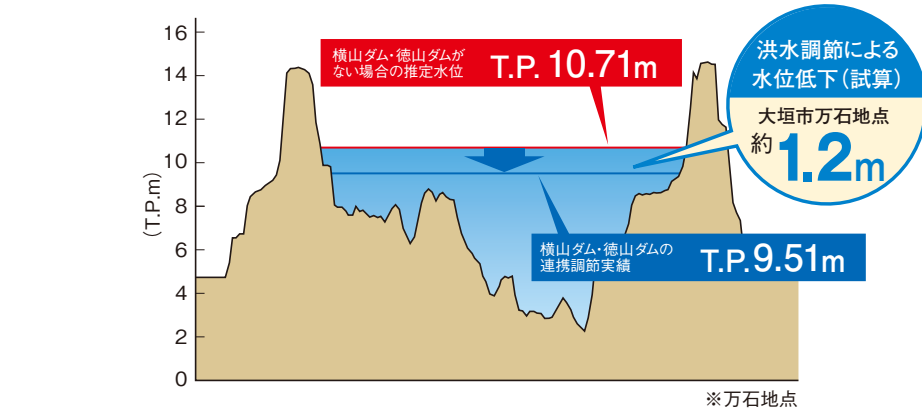


※洪水調節グラフ中の値は毎正時の流量であり、洪水記録の説明数値と異なります。

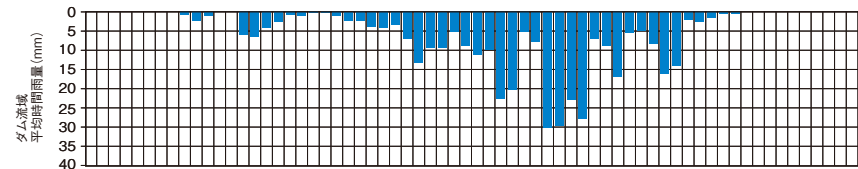
平成24年 台風16号、前線

■洪水記録

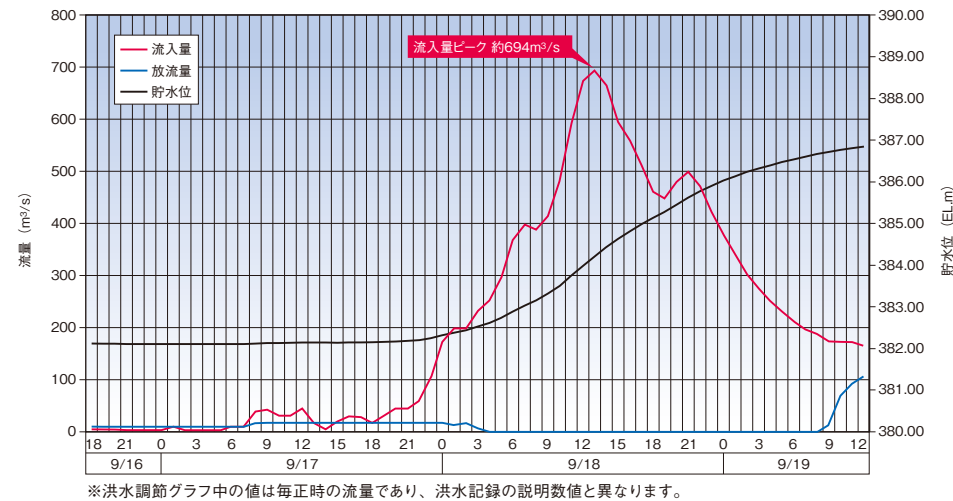
- ・台風16号から変わった温帯低気圧に向かって南から湿った空気が流れ込んだため大気が不安定となり、岐阜県西濃地域に非常に激しい降雨をもたらしました。9月17日の降り始めからの降水量（19日10時迄）は、藤橋雨量観測所（揖斐郡揖斐川町）で525mmを記録しました。
- ・徳山ダム・横山ダムの連携した洪水調節により、徳山ダム・横山ダムがない場合と比較して、揖斐川の水位は、大垣市万石地点（河口から40.6km）で約1.2m低下したものと試算しました。



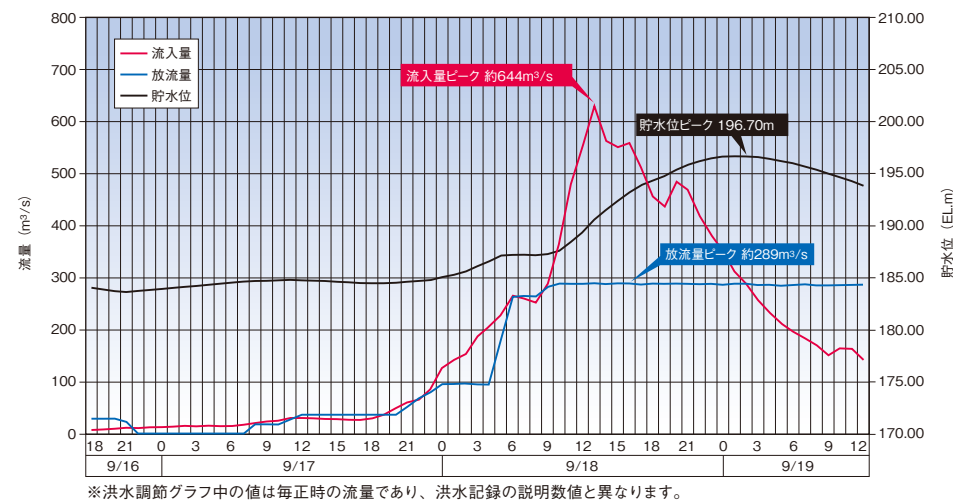
●平成24年9月18日 洪水調節図



徳山ダム洪水調節図



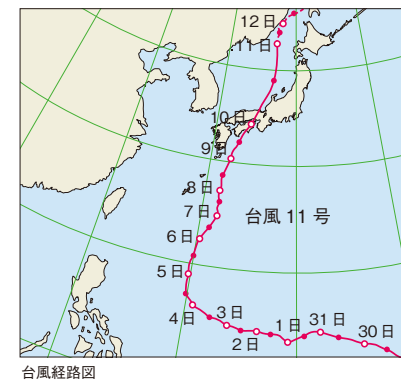
横山ダム洪水調節図



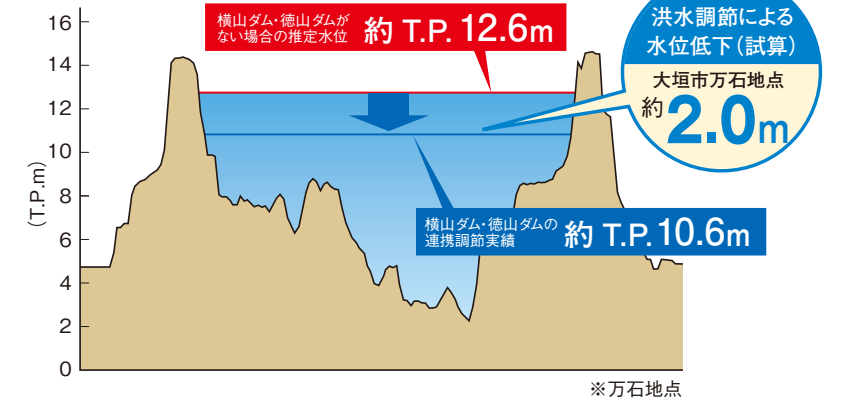
平成26年 台風11号

■洪水記録

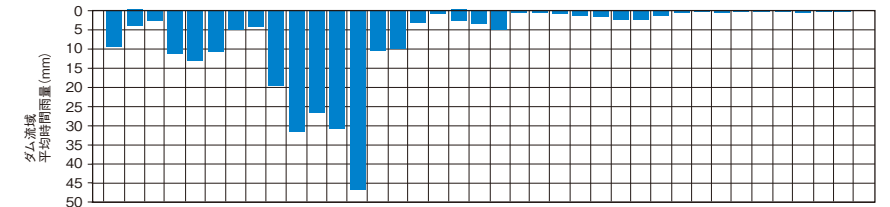
- ・大型の台風11号の接近により、岐阜の山間部を中心に非常に激しい降雨をもたらし、平成26年8月8日夕方から8月11日昼頃にかけて、揖斐川上流域の徳山雨量観測所では8月の平年月降水量の約2.3倍に相当する降水量359mm、藤橋雨量観測所では8月の平年月降水量の約1.3倍に相当する降水量302mmを観測しました。
- ・徳山ダムでは、管理開始以降最大となる毎秒約1,210m³の洪水調節を、横山ダムでは、最大流入量のうち毎秒約640m³の洪水調節を行いました。
- ・徳山ダム・横山ダムの連携した洪水調節により、2つのダムが無い場合と比較して、揖斐川の水位は大垣市万石地点（河口から40.6km）で約2.0m低下したものと試算しました。



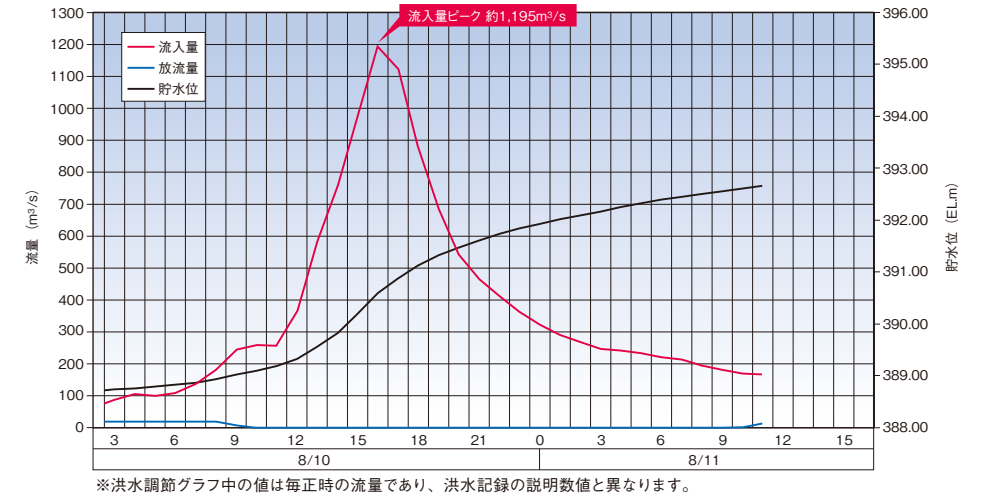
●大垣市川並地先
揖斐川右岸(河口から37.2km)



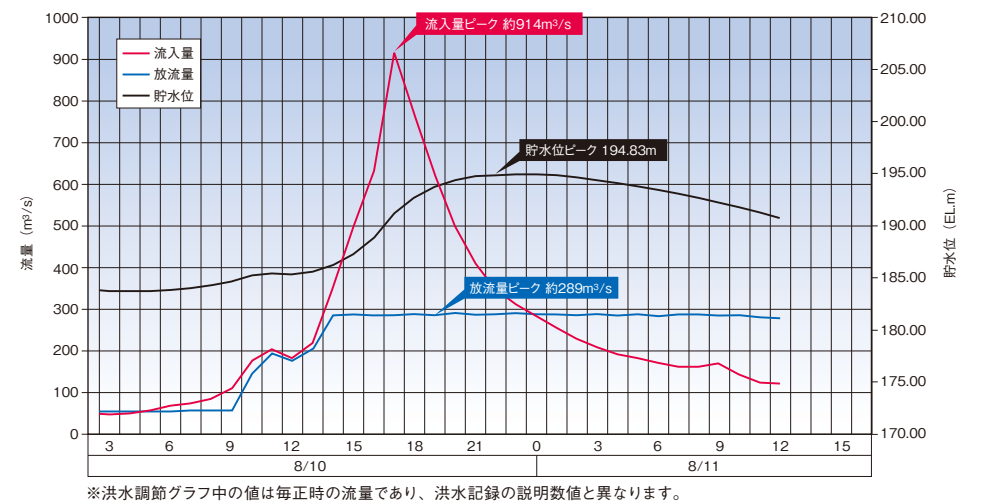
●平成26年8月11日 洪水調節図



徳山ダム洪水調節図



横山ダム洪水調節図



上流域の大規模崩落による 貯水池への土砂流入

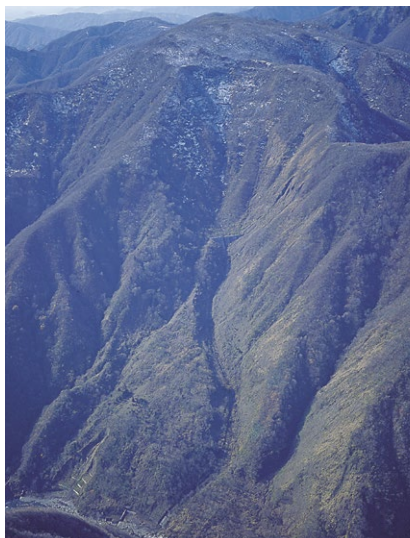
揖斐川流域には「根尾谷断層」に代表される断層がいくつもあり、もろくて弱い地質となっています。そのため、横山ダムの上流では大雨による大規模な崩落が度々発生し、大量の土砂が下流に流れ込みました。

昭和40年9月の奥越豪雨では徳山白谷が崩落するなど、水源山地から4,533万 m^3 もの土砂が流出、横山ダム貯水池にも相当量が堆砂しました。



●ナンノ谷大崩落地

明治28年8月、岐阜県揖斐郡揖斐川町坂内川上のナンノ谷で、大雨による大規模な崩落が2度発生しました。崩壊土砂量は推定で約153万 m^3 でした。



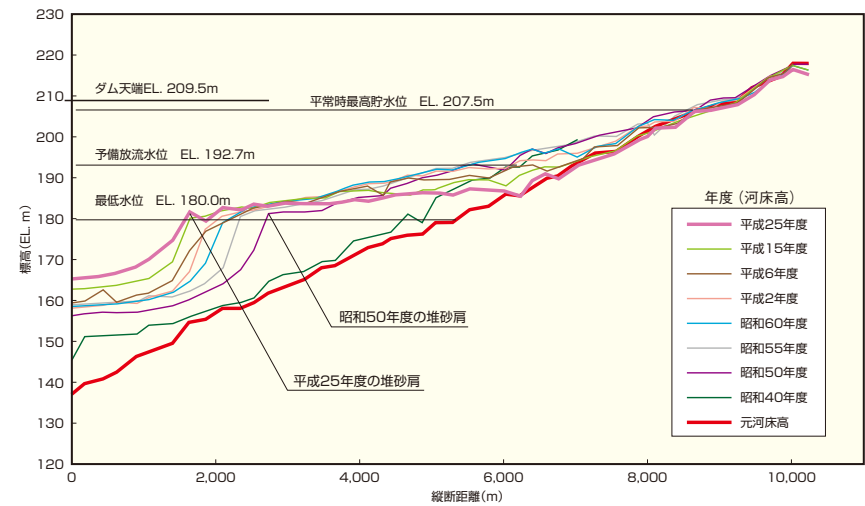
●徳山白谷大崩落地

昭和40年9月の集中豪雨により揖斐川上流の徳山白谷で大規模な崩落が発生しました。崩壊土砂量は約183万 m^3 でした。



■堆砂形状

堆砂肩は昭和40年から昭和50年にかけて急激に前進しましたが、近年は概ね安定しています。また、堆砂肩の前進に伴い、昭和40年から昭和50年にかけては約6,000mより下流で堆積しており、昭和55年以降は、約2,500mより下流のみ堆積傾向にあります。また、堆砂肩位置の安定に伴い、平成2年以降は約4,500mより上流で洗掘傾向となっています。



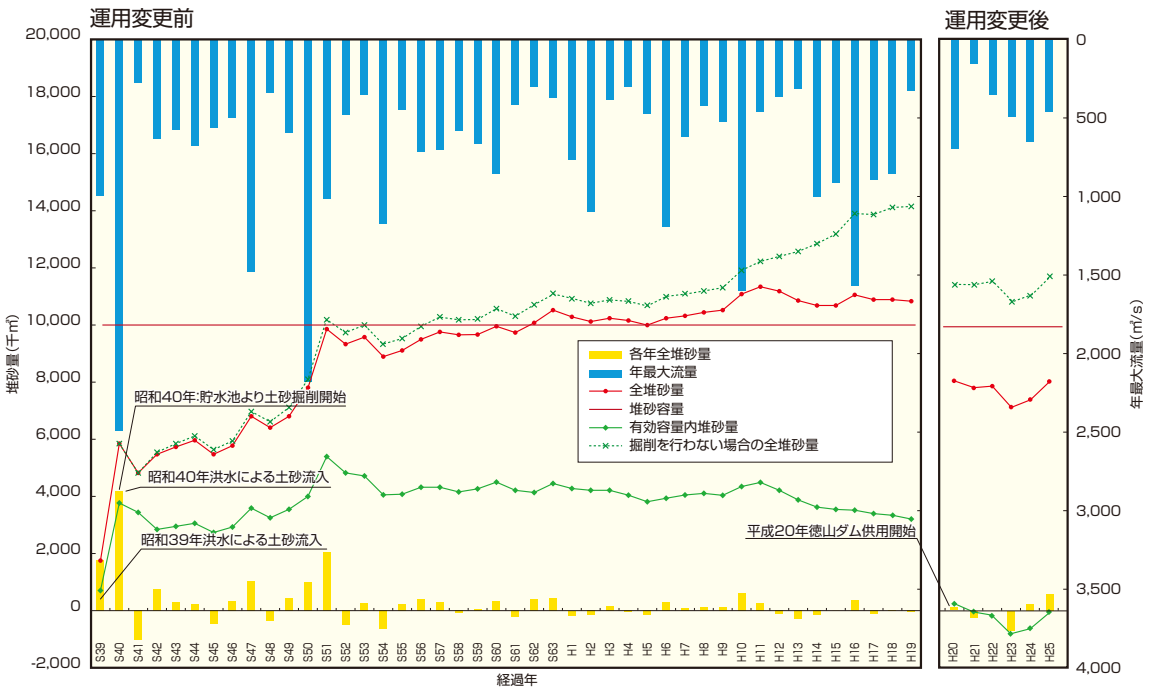
■堆砂状況の経年変化

平成25年の全堆砂量は7,899千 m^3 、計画堆砂量に対する堆砂率は79%です。

経年変化をみると、昭和40年洪水、昭和50年洪水による土砂流入などによって、ダム完成直後に急激に堆砂が進行しました。それ以降、堆砂量はゆるやかに増加したものの、昭和62年には計画堆砂量を上回りました。こうした土砂堆積は貯水池運用に支障を及ぼすため、治水容量の回復と恒久的な堆砂対策が急務となり、平成2年度より平成22年度まで横山ダム再開

事業を実施しました。この再開事業に加え、毎年実施している容量確保のための維持掘削、徳山ダムの建設・供用開始などにより、堆砂量はほぼ横這いの状況が続いています。

なお、平成20年に堆砂量が3,000千 m^3 減となっているのは、平成16年の揖斐川の洪水調節計画の変更に伴う、横山ダムの洪水調節の運用変更（平成20年）にあわせ、河床の見直しを行ったためです。



再開発事業により 治水機能の回復強化を図る

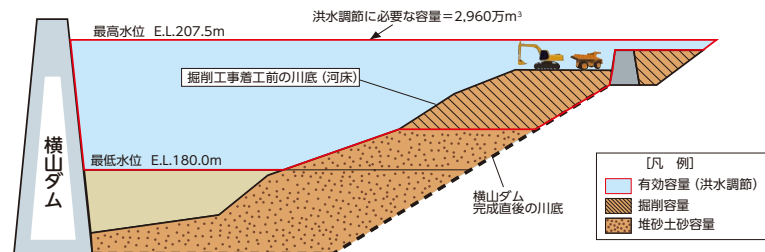
揖斐川上流域が脆弱な地質であることに加え、横山ダム上流域で発生した昭和40年、50年、51年の豪雨などによる出水によって大規模な土砂崩落が発生し、多量の土砂が流れ込んだため、横山ダム貯水池には計画堆砂量を上回る土砂が堆積しました。

貯水池運用に支障をきたすこれらの問題を解消するため、平成2年より横山ダム再開発事業として、貯水池容量の回復、灌漑用水を徳山ダムに振り替えることによる洪水調節容量の増量（容量再編）、恒久的な堆砂対策として貯砂ダムおよび運搬路の整備を行い揖斐川の洪水対策の向上を図ることにしました。また、容量再編に伴い取水施設の改良を実施しました。



■堆積土砂掘削による貯水池の容量回復

ダム湖に流入している堆積土砂を掘削することで、洪水調節に必要な貯水池容量2,960万 m^3 を確保しました。掘削した土砂は徳山ダムの建設材料（フィルター材）の一部や、コンクリート骨材として有効利用されました。



●再開発事業における土砂掘削



■恒久的な堆砂対策

●揖斐川貯砂ダム



幅6.6mのスリットが設けられていましたが、スリットが広く捕捉土砂が下流へ流出していたため、幅1.0mに改良しました。

■堆砂対策〈運搬路の確保〉

●奥いび湖大橋



以前の国道303号は横山ダム天端を通行していたため、幅員が狭く大型車両のすれ違い通行が困難な状況でした。掘削土砂の運搬路として恒久的な維持管理が可能となるようまた、一般交通の利便性向上のため岐阜県との共同事業で建設しました。橋開通後、横山ダム天端はダム管理用通路になっています。

■選択取水設備の設置

再開発事業では、堆積土砂掘削とあわせて徳山ダムへのかんがい容量振替により洪水調節容量を増量しましたが、これにより夏期制限水位が低くなるため、湖岸の裸地化による濁水の増加が懸念されました。

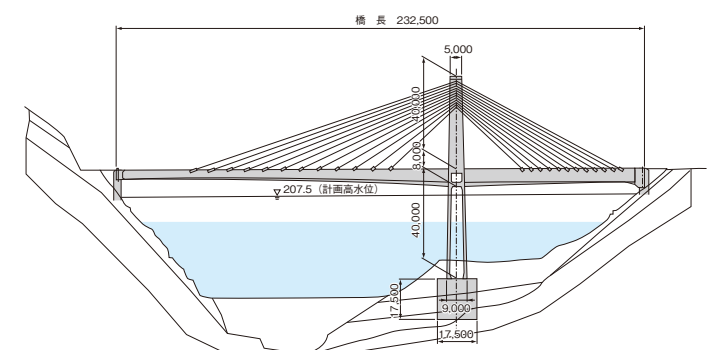
横山ダムにはかんがい期の冷水対策として表層取水設備が設置されていましたが、この設備では貯水位が低いときに選択取水ができず、新たな貯水池運用での濁水対策が十分に行えない恐れがありました。

このため、既設の表層取水設備を更新し、濁水の早期軽減を目的とした選択取水設備を設置しました。

●坂内川貯砂ダム



既設の貯砂ダムを3.5m嵩上げするとともに、左側スリットに魚道を設置しました。

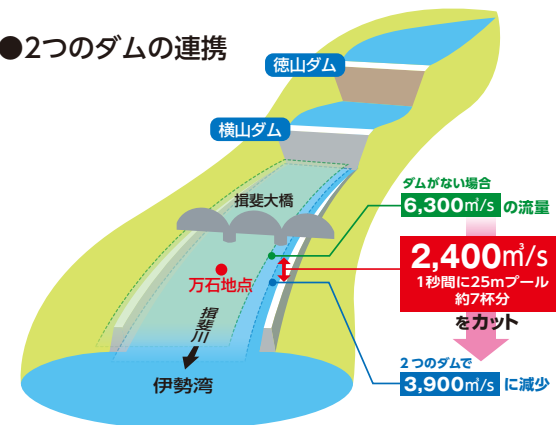


橋長：232.5m
車道幅員：8m（2車線、歩道なし）
開通日：平成23年6月16日



ダム周辺地域の環境整備と、 水源地域の活性化を図る

年度にかけて、ダム堤体内や、ダム貯水池周辺（旧 藤橋村、旧 坂内村）の環境整備を行いました。



横山ダム 下流の安全を確認し、次の洪水に備えてダムの水位を下げます。	徳山ダム 下流の安全を確認し、次の洪水に備えてダムの水位を下げます。
---	---



冠山から流れ出る水は、西濃地域を潤し、豊かな流域を創造

いたるところに自噴水が見られる、水の都「大垣市」

古くから「水の都」と呼ばれる大垣市は、豊富な地下水に恵まれています。かつては各家庭に井戸舟が設けられていて、自噴する水をそのまま流し続ける風景も数多くみられました。現在も良質な地下水を自噴している場所が多数あります。



- 令和6年度開通予定区間
- 令和8年度開通予定区間※
※用地取得等が順調な場合
- ()書きは仮称



揖斐川の源流、冠山

岐阜県と福井県にまたがる、標高1,257mの山です。揖斐川と、日本海に注ぐ九頭竜川の支流・足羽川の源流となっています。冠山の名前の通り、烏帽子をかぶったような姿が特徴です。



岐阜県の産業を支える西濃地域

岐阜県の南西部にある大垣市を始めとする2市4郡9町は総称して西濃地域と呼ばれています。大垣市には日本を代表する大企業もいくつかあるなど、西濃地域は岐阜県の経済・産業を力強く支えています。一方で、岐阜県の特産である富有柿の有数の産地であり、また岐阜県最大の米穀地帯を有するなど、農業も盛んです。



輪中の暮らしを伝える「水屋」

水屋は、たびたび水害に見舞われた輪中地帯の人々によって考え出された建物です。母屋が浸水した時は、高い場所に建てた水屋に避難して生活します。こうして、水が引くまでの間、普段と変わらぬ暮らしができるように工夫したのが水屋です。



日本最大の国営木曽三川公園

木曽三川公園は、愛知、岐阜、三重の3県にまたがる日本一広いスペースを持つ国営公園です。公園は三派川地区・中央水郷地区・河口地区の3地区13拠点で構成されていますが、中でも揖斐川と長良川にはさまれた木曽三川公園センターは、文字通り木曽三川公園の中心として年間を通じて多くの人が集う憩いの場となっています。



水源地域は人間と自然が共生する貴重な地域空間

揖斐川の渇水の歴史を語り継ぐ「夜叉ヶ池伝説」

その昔、日照りに苦しむ村の様子を見かねた人が、「雨を降らしてくれたら娘をやる」との願をかけ、龍神が降らせた雨で村は救われたものの、娘を龍神に差し出すことになった伝説を伝えるのが「夜叉ヶ池」です。標高1,099mの山頂にあり、古来より水が枯れたことがないという、神秘的な池です。



藤橋村が起点となった揖斐川の舟運

江戸時代になって揖斐川の山間部の多くが大垣藩の領地となったことから、平野部との交流が盛んとなりました。江戸時代後期になると山間部での木炭の生産量が増えたことから、輸送量も増大していきました。そのため、藤橋村横山まで揖斐川を船で上っていき、物資を積み込んで揖斐川を下る舟運が始まりました。



明治時代から始まった揖斐川の電源開発

揖斐川の上流域は水量が豊かで、流れが速く、しかも地形がダム建設に最適なV字谷であることから、水力発電による電源開発に適した河川として早くから注目されてきました。明治41年(1908)には揖斐川の支川である粕川に発電所が建設されたことを皮切りに、大正・昭和・平成と多くの発電所が建設されています。



貴重な薬草文化を伝える揖斐川町春日地区

揖斐川の支川・粕川が流れる揖斐郡揖斐川町春日地区は、古くから薬草の栽培が盛んに行われ、そこに暮らす人々は幼い頃から薬草に親しむことで、日々の暮らしに薬草を生かす独自の生活文化を伝えてきました。薬草風呂はもちろん、「腹痛になったらキハダの皮を噛む」というように、薬草それぞれの効能を生かして病気やケガの治療、健康の維持増進を図る暮らしが今なお営まれています。



受け継がれる伝統の谷汲踊り、子供歌舞伎、太鼓踊り

山国の暮らしに鮮やかな彩りを添える祭り。揖斐川流域の揖斐郡揖斐川町では、地区ごとに古くから伝えられてきた独自の祭り文化を大切に守り、継承しています。そうした中には、鎌倉時代から続くと言われる長い歴史を持つ祭りも珍しくなく、その多くが岐阜県重要無形文化財に指定されています。



カヌー競技を通じて揖斐川の魅力発信

揖斐川特設カヌー競技場では、揖斐川の魅力を広く全国に発信し、来訪者を増加させ、観光資源としての活用や地域活性化につなげる新しい取り組みとして、「ぎふ清流国体」のカヌー競技やカヌージャパンカップなど、様々な競技会が開催されています。



ダム見学会開催

●開催日：2024年10月12日(土)

横山ダム堤体内を自由に散策・見学できるイベントを開催し、見学と併せてクイズラリーも実施しました。

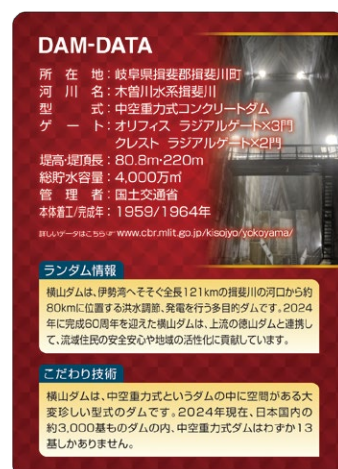
ダム直下の学校法人西濃学園とのコラボ企画を実施し、ダム部・軽音楽部・写真部・模型部の展示やミニコンサートを実施しました。

イベント当日は588名の参加者があり大好評で、今後も見学会等のイベントを開催してほしいとの意見が多数ありました。

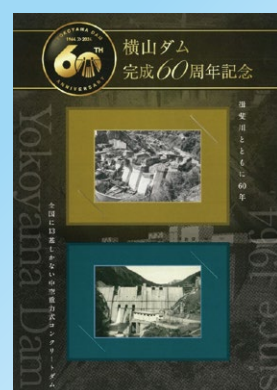


●完成60周年記念カード

イベント当日に横山ダム完成60周年記念カードとダムカードを記念台紙とセットにし、参加者に配布しました。



記念カード・ダムカード台紙



(カードあり)

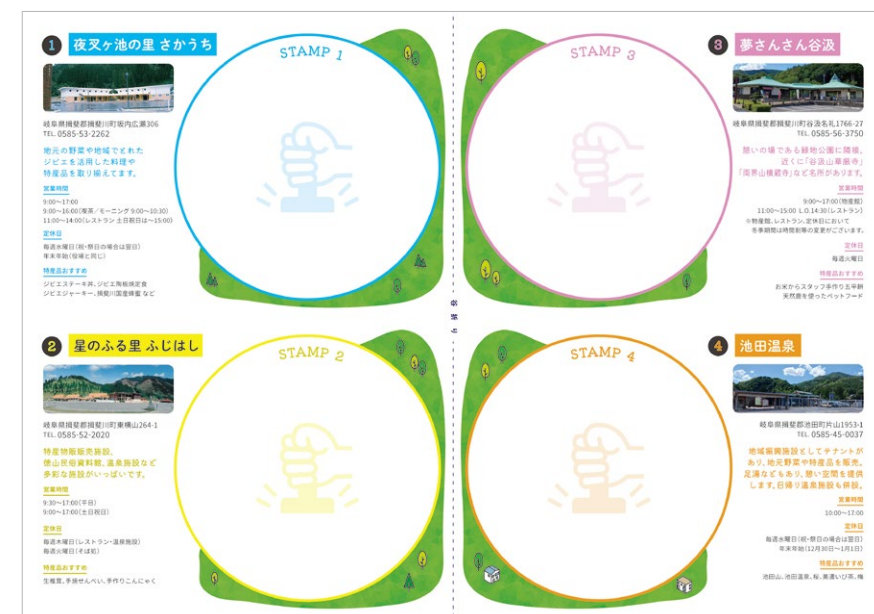
横山ダムご近所道の駅スタンプラリー

●開催日：2024年9月13日(金)～12月20日(金)

揖斐郡内の5カ所の道の駅(夜叉ヶ池の里さかうち・星のふる里ふじはし・夢さんさん谷汲・池田温泉・パレットピアおおの)を巡る「横山ダムご近所道の駅スタンプラリー」を開催し、横山ダムは引き換え場所として多くの参加者が訪れました。達成者には横山ダム完成60周年記念カードデザインのクリアファイルを配布しました。



スタンプ台紙



クリアファイル

発行にあたって

横山ダムは、「治水」・「かんがい用水」・「発電」を目的として昭和39年10月に管理を開始し、令和6年10月で60年を迎えました。

管理開始当時、揖斐川流域で唯一の洪水調節機能を有したダムとして、昭和40年9月洪水をはじめとする数々の洪水に対し、迅速かつ確実な防災操作を実施し地域の安全を守ってきました。利水面では、かんがい用水に必要な水を確保し、沿川の一市六町（岐阜県耕地面積の約15%）の農業発展に寄与するとともに、発電では24,000世帯分の電力を供給し、中京圏の発展にも寄与してまいりました。

平成2年から平成23年にかけては、横山ダムの機能回復を図るとともに、洪水調節容量を増加させる「再開発事業」を実施。平成20年5月には、横山ダムの約10km上流に完成した徳山ダムとの連携操作を開始し、下流域に暮らす方々の生活を洪水から守るための治水能力が向上しました。

令和2年5月、地域のさらなる安全・安心の確保を図るべく、木曽川水系治水協定が締結され、横山ダムにおいても大規模出水の恐れがある場合は、利水者の協力により事前放流を行っています。

また、脱炭素社会の実現に向けて、令和4年度から始まった「既設ダムの運用高度化による増電」にいち早くから取り組んでいます。

水源地域振興として、令和6年3月から揖斐川町や水資源機構と連携し、横山ダム・徳山ダム堤体内で日本酒を貯蔵、熟成しています。ダムの内部は低温であり、年間を通じて温度変化が少ないことから、日本酒の貯蔵・熟成に向いており、まろやかで深みのある味わいになると言われております。このダム貯蔵酒が揖斐川町の新たな魅力の一つとなることを期待しております。

前述の他にも、建設の経緯、再開発事業及び徳山ダムとの連携操作などの横山ダムが担ってきた役割と歩みを本書にまとめました。

末筆ではございますが、ダム建設にご尽力いただいた先人に感謝するとともに、今後の治水事業ならびに地域活性化に貢献するための資料として本書が広く活用されることを願っております。

令和7年3月
木曽川水系ダム統合管理事務所長 稲垣 良和

守り支えて60年、これからもずっと 横山ダム60年の軌跡

令和7年3月 発行

編集・発行

国土交通省 中部地方整備局

木曽川水系ダム統合管理事務所

〒500-8801 岐阜県岐阜市忠節町5丁目1番地

TEL. 058 (255) 2560